
魔王に連れられ魔界旅行

大月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王に連れられ魔界旅行

【Nコード】

N0664J

【作者名】

大月

【あらすじ】

現実世界で神山裕太が呟いた「世界滅びないかなあ」という言葉。ちよつと現時逃避に走っていただけだったが、魔王は契約の言葉とこじ付け、裕太を魔界に引っぱり込んでしまう。それも戦争のために。

それなのに、時間軸のずれにより戦争は当の昔に終結。目的も無く、体に同化した魔王と、魔界旅行をすることになってしまう。

第1話：いきなり目的消滅

「あー、世界が滅びねえかなあ……………」

俺はこんなことを部屋で呟いた、しかし、迂闊だった。

「よし、滅ぼすか」

「そんなことできねーよ……………って誰!?!」

いきなり床に引っ張られるような力を感じ、床にたたきつけられそうになる。

だが床にはぶつからないで、そのままどこかに俺の体は落ちていく。

いや、いやいや、無理だから！ さっきの嘘！

「誰だよてめえ!」

「魔王様をてめえ呼ばわりか？ まあいいぜ、これから魔界戦争をともに戦うパートナーだからな」

「ちょっと待てエ!」

魔界？ 魔界というと、悪魔が悪女とよろしくやってる？ つーかマカオ？ マカオだよな？

「というかどこから喋ってるの？ どこにいるの?」

「ああ、今俺は魂だけの状態だからな。肉体は多分消し飛んじまった」

「うわあ、すげえ嫌な予感がするよ……」

「だが代わりの体が見つかってよかったぜ」

「やっぱり！　なんで俺！？　なにがパートナーだ、生贄じゃねえか。」

「嫌そうにするな、勝てば魔界の全てはお前のものだけ」

「実質てめえのだろうがっ！　ふざけるな！　帰らせる！」

「いやいや、落ち着け。確かに俺は偉大なる魔界最強の魔王様だが……」

「自分で最強だとか偉大だとか言うんじゃねえよ。つーか最強なら、体吹っ飛ばされて別の世界の人間の体を奪いに来るな。」

「お前のからだの主導権を奪うことはできない。魂が先にながちり固定されてるからな」

「当たり前だ、お前みたいに魂がふわふわしててたまるものか。」

「じゃあ何か？　実質戦うのは俺か？」

「そつだ」

「帰るっ！　絶対帰る、帰ってやる！」

「無理無理、別世界への空間跳躍には馬鹿でかい魔力がいる。俺のはそれですっからかんだ」

使えねえ魔王。

「まあ喋ってるうちに魔界だ。世界をくぐる前なら帰れたのに勿体ね」

「先に言えエ！」

俺の叫びむなしく、手遅れだったようです。

父さん母さん、そして兄さん、お婆ちゃんお爺ちゃん、あと親友の武、それに……

「長い！」

「それくらい許せ！」

「違う！ 着地！ した見ろっ！」

俺が向こうの世界の思い出を思い返していたら、地面がほぼ目の前まで迫っていた。

まさか俺、魔界にまで連れてこられていきなり死んで終わるの？

「死んでたまるかア！」

「その意気だ！」

なぜか魔王に背中を押され、いや物理的に押されたわけじゃない

けど、とにかく着地体勢を取ることに専念することにした。
しかし地面まで多分20メートル無い。パラシュートがあっても
間に合わない。

俺は顔から落ちた。

「いつてえエ！ けど死んでねーっ……痛いだけだった」

「まーそうだろうな。お前の肉体と俺の魂は同化した。体も当然
頑丈になる」

「……まさかこれがお前か？」

俺の肩の辺りに、青白く光る火の玉みたいなものが現れている。
手のひらサイズだ、そして多分前側には、デフォルメ化された人の
顔っぱいのが浮かんでいる。

まあリアル魔王ならキモイしな。

「同化した魂は、対話をするためにこんな形を取るんだ。そして
俺は、大魔王タナトス！」

威厳の欠片もねえや。

「俺は神山裕太。目標は、元の世界に帰ることだ」

「そう言つなよ、こっちも過ごしやすい場所だぜ？」

タナトスに言われて、周りを見てみる。どう見ても技術では、元
の世界のほうが進んでいるが、空気が澄んでいて、空も暗雲が立ち

込めているわけじゃない。

環境で言えば、絶対こっちのほうがよさそうだ。

「しかし、変だな……争ってる気配がねえじゃねえか」

「良い事じゃねえか」

「バカやろう。俺はさっきまで、魔界戦争をやってたんだ。まあ敵の攻撃をまともに受けて、魂だけで別の世界に飛んでただけだな」

それって、魔王様、弱いんじゃない？ と、聞くのは可哀想だからやめておくことにした。自分で魔王様とか言ってるし、プライドはあるだろ。

「おつ、悪魔がいる。ちょっとあいつに話して来い」

「ええー？ 俺が悪魔と話すの？」

「しかたねえだろ！ 俺の姿は他人には見えねえんだよ」

しかし悪魔とはいえ、いるのは普通の女の子だ。というか結構タ
イプです。

頭にちよこんと生えた、犬っぽい耳が素敵ですね。あとなんか尻
尾も生えています。

「ありゃワーウルフだな。本来獰猛で、鋭い牙を持つ種なんだが
……」

「嫌だっ！ そんな人可愛くても関わりたくない！」

「待て待て、だがアレがいきなりガブッと来ると思つか？ 俺にはそうは見えねえ」

そう言われれば、誰がどう見ても大人しいコスプレ好きの女の子だ。まあ耳と尻尾は本当に生えてるんだろうけど。

「心配するな、お前は天魔王タナトス様の魔力を持ってるんだぜ」

すつからかんなんだろうが……あてになりやしねえよ。

まあいいや、言葉は通じる……だろうな。タナトスの言葉が分かるし。

「あの一、すみませーん」

「はい？」

あら、可愛らしい声。よかったー。

とりあえず大丈夫そうなので、タナトスに小声で確認する。なんでも話しかけさせたのかを。

「今は魔暦何年か聞け」

「（何だよ魔暦って、悪魔教が決めたのか？）」

「そうだ」

「（そうなのかつ！？）」

デーモン小暮はここから来たのか……違うよな。

「今つて魔暦何年でしたっけ……？」

めっちゃ恥ずかしいこと聞いてるんじゃないの、これって。

「へ？ えつと、16000年ですよ」

「ありがとう」

16000年って、普通に言われても俺には何のことかさっぱりだ。

質問に答えてくれた、可憐な女性は、歩いて去っていった。

「何が分かったんだ？」

「ああ……どうやら戦争は終わったらしいな」

「へ？」

「戦争が始まったのは魔暦14800年。俺が飛ばされたのが15000年。どうやら時間軸が1000年ずれたらしい……」

お、俺は、何のために魔界まで！？

「責任取れ！」

「いや、待て……おかしいんだ。なぜ戦争は終結し、ここまで平和に……」

「んなことどうでもいいから、帰らせるー！」

俺は魔王に無理やり連れてこられたのに、まさかの戦争は終わっていたというオチで、元の世界にも帰れないという、かなりレアな状況に陥ってしまった……

第2話：人……悪魔助け

「この辺りは人がいない、いや悪魔か。悪魔が少なえな」

「けっ、しけた所に落っこちたもんだぜ」

てめえのせいだろうが。本当に口が悪い魔王だ、俺もそこまでは言っていないのに。

さっきのワーウルフの女性にでもついていってれば、人のいる場所……悪魔のいる場所にはいけたかもしれないな。うーん、ミスったな。

そういえば魔界に人間はいないのだろうか、というか悪魔の中でも、魔王にとりつかれている人間の俺は、どういう立場になるんだ？いろいろ魔界についても気になるが、この口の悪いだけのふわふわ野郎に聞くのも癪だしやめとこう。どうせ分かるだろ。

とりあえず道をまっすぐに進むことにした。ふわふわ野郎の意見は聞かない。

すると、少し進んだ場所で、地面に倒れている人がいた。顔が見えないからよく分からないけど、金色の長い髪が見えるから、女性かな。

根っからのジェントルマンである俺は、困った女性を見るとほってはおけないのであった。

「あの……大丈夫か？」

「……す、すまないな……」

聞こえたのは男の声だった、撤回。

「悪い、人違いだ」

「てめえ、悪魔より悪魔らしいな。もしかしたら、魔王なんじゃねえか？」

「魔王はてめえだろ」

おつといけない、タナトスの姿は俺にしか見えないから、俺が一人で喋っているように見えるのか。

さすがに変な人……じゃなく変な悪魔と思われてしまったのか、金髪ロング男は黙って俺のほうを見ていた。

「……と、いうのは冗談で。なぜこんなところで倒れてる」

「襲われました……」

「誰にだよ」

「誰というか、魔獣に……」

おいおい、この世界にはそんな物騒な生物がいるのか？ 聞いてねえよ！ 今すぐ帰らせろ！

「魔獣といってもピンキリだ。小せえ小物もいるし家畜もいる。まあ当然だが、お前の想像したような化け物もいるがな」

悪魔は言葉が通じるからまだいいが、それは最悪じゃないか！

「この辺りは……虎が出ます」

「マジかよ」

あー、嫌なこと聞いたな。

つーかなんでこんな普通の場所に虎なんか出るんだよ。

全く、やっぱり魔界なんてろくな場所じゃないな。

「ガルルルル……」

「……最悪だ」

いきなりじゃないか、しかもなにこいつ。黄色っぽくて黒い模様が入っていて、猫っぽい外見だけど、でか過ぎだろ！ これただの虎じゃねえよ！

……分かった、俺ってここで死ぬんだ。空から魔界に降ってきて、その瞬間は生き延びたけど、やっぱり死ぬんだ。虎に食われて……

「死んでたまるかア！」

「その意気だ！ ちなみにお前はあの虎に1万回噛まれても、内出血すらしないがな！」

「ああもう！ 緊張感無くなるなあ！」

でかい虎が全力でぶつかってくる。
頭突きを喰らう瞬間だけは、マジでちびりそうだったけど、俺の体にはじき返されて虎が道を挟りながら転がっていくのを見ると、別の意味で恐怖を感じた。

俺どんだけ強いの？

「殴っちゃえば、いいのか？」

「まあ、殴ったらあの辺の山に突っ込むな」

山って、1キロは離れてるんだけど……

明らかかな力の差があるのだけど、虎は突っ込んでくる。とりあえず、虎の頭を殴ってみよう。

「グアアオオオ！！」

「う、こわっ！」

「腰引け過ぎだっつーの！ このへたれ！ チキンやろう！」

無茶苦茶言うな！ 人間は体長5メートルの虎に突っ込まれて平然としていられるほど、本来強くないんだよ！

今だって自分の体の変化についていけねーよ！

直撃し、今度は俺が飛ばされた。といってもほとんど俺が自分で後ろに飛んだだけなんだけど。

すると、虎は俺の上に乗ってくる、怖い！ どきやがれ！

「グオオオ！」

「あれ？」

体勢を起こしたら、虎が飛んでいった。

「マジかよ……」

「それくらい当然だ！ なんせこのタナトス様が力を貸してるんだからな！」

てめえは俺に寄生してるようなもんだろつが。何を偉そうに。

虎はまた体を起こして、こっちを睨んでいる。

ああー、どうしようかなあ。

「ほんとお前はビビりだな」

「うっせえ、本能的によけちまうんだよ！」

「よけるなら完全によけるよ！ 一々転がられると、俺まで目が回るんだよ！」

「勝手に回ってる……ああ！ 来たーっ！」

とりあえず横に飛ぶ、恐ろしく体が速く動く。簡単にかわせてしまった。

虎は俺の真横で攻撃する相手を見失ったのか、きよろきよろして

いる。

今なら……ぶん殴れる！

「うおおおお！」

虎の横っ腹を思いつきりぶん殴った。

ゴシャアン、とすげえ音がし過ぎて、殴った自分に引いてしまった。そしてその直後、虎がすごい速さでぶっ飛んでいった。

そしてタナトスの言った通りに、1キロほど先に見える山の中に突っ込んで行った。

「ぎやはははは！ 飛んでったぜアホ虎！」

「笑うな！」

「なんでだよ！ おもしれーじゃねーか！」

だめだこいつ、なに言っても無駄だ。
というか良かったのか、あんなふうにぶっ飛ばしちゃって。

「あの、ありがとうございます」

「おおい！ 感謝されちゃってるぜ」

黙っているという意味で、右肩の上のふわふわしているタナトスを握り潰すが、あまり意味は無くまた元の形に戻る。

「いや、襲われたから殴っただけだ」

「でも助かりましたから……お礼がしたいのですが」

「金だ金エ！」

ほんとこいつ黙らないかな……
うるさすぎて鬱になる。

それに魔王が下々の悪魔から、金を受け取ろうとするなよ。

「いやいい、じゃあ俺を町に案内してくれない？」

「町に、ですか？」

「ああ」

「それだけですか？」

「それで助かるからな」

なんか俺、滅茶苦茶に強いし。

助けた男の案内で、俺は一応町に行くことはできそうだ。

第3話：詐欺師の町

助けた金髪ロン毛男の案内でやってきた町は、町というか都という感じで、どっかのRPGの王都くらいの規模はある。

かなりの人がいる、そして、綺麗な女の人がたくさんいる……

「美人は人類共通の宝だな……」

「人類じゃねえよ」

「ここって魔界じゃなくて、楽園なんじゃないか？」

「しらねーよ、ただあつという間に地獄に変わるかも知れねえから、楽園だと思えているうちは幸せかもな」

俺の肩の上にいるふわふわ、一応大魔王レベルのすごく強い魔王らしい。名前はタナトス。

口が悪いだけのふわふわが、何か意味深なことを言う。人がせつかく楽園気分を味わっているのに。

というか地獄になるわけが無い。

「この町は、戦前から存在していた。つっても外観は随分変わったが、多分中身は1000年前と変わっちゃいねえぜ。お前みたいなのは、獲物になりやすいから気をつけるよ」

「……なんの話だ？」

「この町はロータウン、俺の知ってるのはもっとボロイ街だったが、ここが発展するって事は、世界が腐り始めてるってことだ」

「悪いが意味分からん」

「当たり前だ、まだ何も言ってるねえ」

さつさと言えよ、一々むかつくな。

「ロータウン、意味は法の町。だがここは、別名ライターゾーン。詐欺師の町だ。名前から詐欺だろ？」

……こんなに美人の多い町が、詐欺師の町？ そんな分けないだろ、こいつも1000年間を知らないわけだから、どうせ変わってるだろ。

「そういえば、なんでこの町だけ分かったんだ？」

「これでも魔王だから、闇の部分には詳しいんだよ」

いや、理由になってるねえ。

追求してもいいが……とりあえずこの町は興味深い……

なんと、リアルバニーさんがいる！ これヤバイ！ 出血多量で毎年数千、いや数万人の死者がでていると見た。

「この町は金が動いている。といってもちまましたもんだが、真面目にためえみてえなヒョロつとしたへたれが働くよりはるか収入はでかい。稼ぐぜ」

「どうやってだよ、稼ぐにしても元手がゼロなんだぜ？」

「バカにしちゃ上出来だ、よく気づいた。だけどここには、元手無しで金を稼ぐ方法なんかいくらでもある」

そりゃ良い話だと思っただが、なんせ悪魔だろ……
どうせリスクが馬鹿でかかったり、命の危険があったりするんだろっな。

「その兄さん、ちょっとした儲け話がある。どう？」

「ああ？ 誰だこの不健康そうな野郎は？ 捻り潰そうぜ」

タナトスが俺にしか聞こえない声で、俺に声をかけた人物を罵倒する。つーか捻り潰すのは俺の仕事になっちまうから絶対やだ。しかし不健康そうは、的を得ている。目のしたには隈があり、髪も伸び放題。顔色も青白い。フードつきの真っ黒の服で体が隠されている。

見るからに怪しい……

「ちょっとこちらへ……」

「おい裕太！ こいつの顔面、思いっきりぶん殴れ！」

「は？」

「見るからに詐欺師だ！」

そんな、見かけで人を判断しすぎだろ。確かに怪しいけど。

「この野郎体隠して、魔術を使ってやがる！」

「うっ……まじ？　つか本当だろうな？」

殺してしまわないよう、ちょっと加減して軽く頬を殴ってみた。しかし、詐欺師っぽい男は、すごい速さで道路を転がっていく。

「やべっ！」

「バカやろう手加減しすぎだボケエ！」

「仕方ないだろっ！」

「アレだったら野郎は絶対に証拠を隠す！　そうなれば逆にこっちが危ない。今すぐ止めを刺せ！」

無茶苦茶だ、俺にそんなことができるはずが無い……

「ちっ……なぜばれた？　だがこうなれば実力行使しかねえ……」

詐欺師っぽい男、というか言動が詐欺師のそれだ。そいつは黒い服を脱ぎ捨て、完全に戦闘モードに入っている。

「あいつバカだぜ、力の差が分かってねえ。こりゃチャンスだ、詐欺師を捕らえたとあれば、それなりに金は手に入るはずだぜ」

「じゃあ戦うのかよ……」

詐欺師は俺のほうに突っ込んでくる。だが虎ほど動きが速くない、手には武器を持っているが、どう見ても重たすぎる武器を使っている。

カウンターパンチ、は無理だけど、足を突き出せば絶対あたる。

「死ねえ！」

「魔王キック！」

「変な名前付けるなっ！」

俺の蹴り、魔王キック、命名タナトスが詐欺師に直撃し、見事なほど綺麗な弧を描きながら飛んでいき、建物の壁に激突して止まった。

「今、すげえ技が完成しちゃったな……オイっ！」

「嬉しそうにすんな！俺はネーミングセンス無さすぎて驚いてんだよ！」

「なんだと！っとそんなことより。せつかくの金を誰かに持っていかれちゃかなわん。あの野郎を拾いに行け」

もう金扱いもどうかと思うが、手柄を取られるのは癪だ。

結構な距離を飛んでいってしまった詐欺師の方に走っていく。そういえば走るのが尋常じゃなく速くなっている。

「……うっ……あんだ、なにモンだ……」

「まだ生きてるぜ、しぶといな。おい！止め刺しちまえ！」

「いいじゃねえかこれで」

「……まあいいぜ、どうせ逃げられる体力もねえだろ」

とりあえず、もう立つこともできないであろう詐欺師を持ち上げる。軽いなあ、自分の怪力が若干嫌になる。

「こいつ、どうするんだ？」

「その辺の警備の悪魔にでも引き渡せば、金になる」

警備の悪魔、悪魔が警備するのか……まあこの世界の悪魔って想像とは違うしな。

そりゃ警察みたいなのがいってもおかしくないか。

「あいつとかそうだな」

「げっ！……アレのぼうが犯罪者面じゃねえか……」

なんか怖い、ちょっと離れて声をかける。

「す、すみませーん」

「なにビビってやがる！」

だって角生えてるし！ 目が鋭いし！ 牙見えてるし！ おまけになんか顔にキズとかあるし！

「お？ どうした？」

「これ、詐欺師です」

「協力感謝する、謝礼が出るだろうから、ついて来てくれ」

良かった……

案外普通の人だ、いや普通の悪魔だった。

とにかく警備の悪魔についていくこととした。

第4話：ちびっ子魔王とNGワード

詐欺師をぶっ飛ばして、警備の悪魔とかいういかつい犯罪者面の悪魔に連れてこられたのは、かなりでかい城だった。

立派な城壁、立派な門。入り口では身長5メートルはあるつかと
いうごっついおっさんが、2人、武器を持って立っている。さすが
は魔界クオリティ。

「ハッ！ やっぱり腐ってやがる、何だこの薄っぺらいのは？
城か？ 倉庫かと思っただぜ」

「人が感心してるのに、ぶち壊すんじゃねえよ」

「魔王様がお待ちです」

なんで、詐欺師を捕らえて魔王様に会うんだよ。

というか会いたくない！ 魔王ってどいつもこいつも性格最悪で、
口悪い連中ばかりなんだろ。

もう謝礼要らない気もするんだけど、今さら帰れず城の中へ。

めちゃくちや綺麗なシャンデリアに、廊下からすげえ広い。ちよ
こちょこ金持ちそうな悪魔が歩いていたりする。

まあ、豚みたいなのが多いけど。やっぱり良いもん食ってるのか
なあ。

ただ時々綺麗な女性が見れる、うーん、癒されるねえ。ネロミミ
も悪くない。

「魔王様の前では、くれぐれも、粗相のないように」

「は、はい」

「でなければ死ぬので」

「はいっ!？」

「私もろとも……!」

超犯罪者面の男が、若干恐怖に身震いしている。

魔王つてのは、どれほどの化け物なんだよ……あー帰りたい。

「魔王様つて、なんて名前ですか？」

「エリス様という。くれぐれも、本当に礼儀には気をつけるように」

相当の化け物らしい……

こいつでも相当強そうで恐いの、それがここまで脅える相手となると……生きて帰れるかな……

あれ？ 俺つて何しに来てるんだっけ？

「処刑台に上る死刑囚みてエな顔すんな。最終問題がありや消しやいいんだよ!」

「ほんと、お前の声が俺にしか聞こえなくて良かった……」

「しかし、エリスか。なんか聞いたことある名前だ」

「人違いだろ、1000年経ってるんだろ？」

「バカやろう、悪魔の寿命が1000年やそこから終わるわけねえだろうが。一応魔王を名乗ってるような奴ならなおさらだ」

悪魔の常識語られても……

「1000年以上って、悪魔ってほとんど高齢者だよ。」

「タナトスは何年くらい生きてるんだ？」

「10万そこらか」

「爺じゃねえか」

「あのな、悪魔にはそういう概念はねえよ。体の老化も、固体によつて速度が違う、生まれつき爺なやつは爺だが、死ぬまでガキの姿のやつもいる」

へえー、ためになるねえ。

「誰と喋ってるんだ？」

「あつ、いや……」

すぐ横に、警備の悪魔がいるの忘れてた。こいつらにはタナトスは見えないから、そりゃ不自然だよな。

「自分と」

「……そうか」

めっちゃ変な人みたいに見られた！

「もうちょい気使えよ、ボケ」

てめえが言うな！ とは叫べない。

「しかし、大きな城ですね」

タナトスは放っておいて、警備の悪魔と話すことにする。

「このあたりでは、かなりでかいな。中庭ではドラゴンが放し飼
いになっているから、建物の部分は少ないんだがな」

「危なくね？」

「確かに、脱走すれば危ない。でもそれは無いな」

「なぜ？」

ここで警備の悪魔は体を震わし、少し黙り込んでしまう。

「……エリス様が……おられるので……」

どうやら魔王エリス様というのは、ドラゴンさえも服従させる化
け物らしい。というかドラゴンってどんなのかしらねえわ。

「ちなみにドラゴンなら、その窓から見えるぞ」

「へー……うわっ！ でかっ！」

体長30、いや40メートルはあるかという化け物が、中庭にいる。全体的に黒くて、結構離れているのだが、瞳が真っ赤なのが分かる。

爪や牙が鋭く、大きな翼もあり、かなり強そうだ。なんかミラボレアスみたい……

「同種のドラゴンとしては小型であるが、それでもかなりの強さだと聞く。この城では魔王様と、担当の飼育係以外にはなつかないんだ」

あんなもんに懐かれてもなあ、というか魔王には懐いては無いんじゃないか？

「じゃあ飼育係というのもしかかなりできるんですか？」

「どうだろうか、私は知らん」

まあ弱くはないんだろうな。

「ブラックドラゴンだな、確かに小型だ。この城にぴったりだぜ」

「ブラックドラゴンってそのままだな……」

これ以上警備の悪魔に妙な印象をもたれないよう、気をつけながら小声で話す。

「分かりやすさが大事なんだよ！ 黒いからブラックだ、緑ならグリーンだ」

もうちょっと考えて名前をつけてやっても良かったんじゃないか？
まあでもそんなもんか、ちゃんとあのドラゴンにも固有の名前があるんだろっ。

「この部屋だ、いいか。本当に頼むぞ、くれぐれも粗相のないように、ちゃんと謝礼はでるから」

うっかりしてた、俺は詐欺師を捕まえたから謝礼を貰いに来てるんだ。

別に魔王の処刑を受けに来たわけじゃない。

魔王の部屋に通じている扉は、ほかのとは全く違う。そして分かりやすい。なぜなら、『魔王の部屋』って書いてあるからだ。

警備の悪魔が、扉を開けた。その瞬間、警備の悪魔はすごい速さでどこかに走って消えた。

そうとう恐いらしいな……

だが部屋の中にいるのは、まさに王様！ という感じのでかい椅子に、ちよこんと座っている小さな女の子1人だ。

椅子がでかすぎて、もう2、3人座れそうな感じだ。

「おおっ、あんたがあのだ詐欺師を、30メートルくらいふっ飛ばしたっていう一般市民？」

詐欺師を飛ばしたのも、一般市民なのも事実だが、それ以前にこのちびっ子は誰だよ。

「ええつと、魔王は？」

「目の前のチビガキじゃねえか！ てめえ眼球腐ってんじゃないやねえ

か？」

いや、見えてはいるんだが……

そういえば、悪魔には年齢の概念がほとんどないとか言ってたな

……

「このちびっ子が魔王？　なんというか威厳が……」

「ほう、どの辺に威厳がないと？」

「うわっ」

聞こえてたのか、地獄耳だな……結構距離あるよ？

「胸だ胸え！　ギャハハハ！」

「そうそう胸の辺りって……バカかお前は！」

「バカは、貴様だ無礼者！」

くそう！　タナトスの声はせつかく聞こえてないのに、俺が伝えてどうする！

つか今の地雷だったばくねえか？　めちゃくちゃ怒ってませんか
魔王エリス様！

「死ねえ！」

「ひいー！」

視界がピンク一色に染まる、まぶしい。どうも魔王エリス様の攻

撃らしいが、どこからどう来たのか分からない。ただ分かるのは、避けられない。

「うわああ！」

直撃し、床を転がった。体中痛い……

「いつてええ！」

「ええ！？ それだけ？ そんなんで済んじゃうの？」

いきなりピンク色の何かを、俺に浴びせた張本人が目を丸くして一番驚いている。

ちなみにタナトスは、俺が転がったことに怒っている。しかし、それは無視する。

「そりゃ全力じゃなかったけど……あんた何者？」

「何者と……言われても」

そつえば俺って何者なんだ？

「魔王つつとけ！ 人間だとか、変に別の種族を騙るよりやましだ」

「ほんとに良いのかよ……」

「俺が魔王なんだからいいんだよ！ とつとと答えるのろま！」

仕方ないな……

「ま、魔王だ」

「どこのよ」

「えっと……」

どうすりゃいいんだよ！ とりあえず右肩の上のふわふわを睨む。

「考えてなかったぜ」

「浅いなてめえは！」

「てめえの国の名前でも言っとけよ」

「に、ジ、ジパングだ」

日本と言いかけてやめた、なんかこの魔界はカタカナ語っぽいからだ。それでジャパン、にしようと思って、やっぱりジパングにした。理由はあまりない。

というかダメだろ、騙しきれないだろ。

「ふーん、ま、どうでもいいんだけど」

魔王というのはどうも適当な奴が多いらしいな。

「最近の悪魔にしては珍しく強いわね。どう？ 仕事がないならここで雇うよ？ というか仕事があったらやめたら？ つか断ったら死刑ね、どうする？」

いや、それ脅迫って言いますよ、魔王エリス様。
しかし雇ってくれるなんて言うなら、こつちには断る理由はないな。殺されるか、働けるか、こんな2択、迷うまでもない。

「……エリス、ああ！ 思い出したぜ！ こいつは俺の元々は家来だったエリスじゃねえか！」

「知り合いか？ 好都合だな、説明したらいいんじゃないか？」

「いや、そんなことしたらお前の首はない」

「な、なぜだ……？」

魔王エリス様には聞こえないように、タナトスとひそひそ話す。

「あいつは多分、俺を殺したがっていた……」

「……どんだけひどい扱いしてたんだ……？」

「そうじゃねえ、あいつは俺に忠誠心の欠片すら見せずに、王位を狙ってたからな。俺が生きてるなんてことになれば、邪魔だろ」

「……なるほど」

いきなり俺に、普通なら死んでるほどの攻撃をしてきた奴なら、全然おかしくないな。

「と、とにかく、どうする？ 俺はそんな奴の下で働くのか？」

「別に死ぬ気で戦うなら、俺は止めねえし、力は貸すが？」

「お前魔力すつからかんだろ？」

「ふん、まあな」

ダメだ、勝負になりそうもない。

「どうする？　ここで働くか、死ぬか」

随分直球の2択だな、もはや脅迫でしかねえよ。

「は、働きます……」

「そうよねそうよね！　そのほうが良いわよ。そう言ってくれる
と思ってた！」

人を究極の2択で脅迫した直後とは、思えないほどの純粹な笑顔
だ。

笑ってれば、ちびっ子も可愛いもんだ。

「じゃあ……そこに跪きなさい」

純粹を邪悪に変えることにしよう。

第5話：仕事が決まった

「……俺にちびっ子に虐められて喜ぶ性癖はないぞ……」

「あたりめえだ、そんな変態と同化するくらいなら、俺は死んでる」

心に深い傷を負った俺は、城の中のある部屋に案内された。

具体的に何をされたかというところ……だめだ、思い出すとまた心が折れる。

「仕事って、まさかアレじゃないよな？」

「さあな、エリスの奴の考えることは、俺でも想像できん」

俺だって想像もできない。

普通の王様が、普通に城に雇う使用人とかは、家事やらなんやらをするのだろうが、魔界の王様は俺に何をさせるのか……

そういえば、エリス様はどうみても女の子なのに、魔王なんだな。

「エリス魔王妃、とか言わないのか？」

「そりゃねえな。強い奴が魔王、その男だ女だの差はねえよ」

「へえー」

男尊女卑なんて言葉はなさそうだな。

男女平等、そして実力主義か……

俺は幸い、そこそこ強いらしい。まあエリス様には手も足も出ないみたいだが、虎にも詐欺師にも、苦戦どころか一方的に勝てた。

「ほんと、仕事ってなんだろう」

「ビビッてんじゃないよ！」

ビビってるといつか、心配なんだけどな。

庭の掃き掃除……は絶対嫌だな、バカみたいに広い上に、ブラックドラゴンとかいう危ない生物がいる。

料理も無理だ。

なにするんだろ。

コンコン、とドアをノックする音がした。

「どうぞ」と言う前にドアが開けられた。ノックしたなら、返答を待てよ。

ドアを開けたのは、俺を魔王の部屋まで案内し、扉を開けると即行で逃げ出した、犯罪者面の警備の悪魔だ。

「大丈夫か？」

「ああ、なんとか……」

「すっかり忘れていたんだが……これが詐欺師を捕らえてくれたことこの謝礼金だ、受け取れ」

警備の悪魔に、小さい袋を渡された。

なんかチャリチャリいつてる。紙幣ではなく、硬貨らしい。まあ

なんかそのほうが、異世界にやって来たっぽい。

袋の口を開けると、銀色の硬貨が3枚入っていた。
なんか300円、って感じで安っぽく感じるんだが……

「これって、どれぐらいの額なんだ？」

「そうだな、この町の平均的な月給が銅貨10枚。そしてその銀貨は1枚で銅貨100枚分の価値がある」

えーっと、整理すると。

銅貨10枚が一般人の月給、ちょっと高めかもしれないが30万円として、それが100枚で銀貨1枚。

つまり銀貨1枚が300万円、そしてそれが3枚……

900万円！？

「す、すげっ！」

「あの男は一応殺しもやってるからな、凶悪犯だ」

あんたの顔もそう見えるが、そんなことはどうでもいい。

900万円が俺の手の中に、あるんだぜっ！

「お前……たかが銀貨3枚程度で、何をにやっついてるんだ？」

「うるせえ！ 庶民舐めんなよ！」

「……大丈夫か？」

あ、またこいつがいることを忘れてた。
顔が凶悪なのに、存在が薄いな。つか凶悪な顔にもなれたから、
ただのおっさんだ。

「大丈夫だ、とにかくありがとう」

「そうか……」

警備の悪魔は俺の部屋から出て行った。

「……よし、買い物でも行くか」

「ああ？ そんな小銭でなにするんだよ」

魔王であるこいつは、本気でそう思っているらしいから性質が悪い。

普通の金銭感覚の人からすれば、900万円は超大金だったのに。

とにかく俺は、町にくり出そうとした。

くり出そうとしたんだが、俺はエリス様に捕まってしまった。

「じいじくのみ」

「か、買い物に」

「勤務時間中になにしてんのよ！」

「ええ！？ 初耳なんですけど！」

「あんたは22時間勤務！」

「無茶苦茶だ！」

この世界で、弱者に権利はないのか！？
ほんと、体ちっちゃいのに腕力強すぎ！ 腕つかまれたらびくと
もしねえ。

「とにかく仕事だから、ちょっと来て」

「いやいや、すでに引きずってるじゃないですか……」

「ブン投げようか？」

「引きずられさせていただきます」

タナトスの魔力が、突然全回復とかしたら、こいつくらいは簡単に倒せてしまうのだろうか。

「ちっ！ むかつくぜ！ てめえがへボへボなばかりに、俺まで引きずられてるんだぞ！」

今ばかりは、ただの人間であることが残念だ。

「ついたわよ！ さあ入る！」

「うわああ！」

部屋に投げ込まれた。

結構広い部屋だ、なんか怪しいごつい機械とかが見える。ただ俺の世界のものとはかなり違う。

RPGとかにできそうな機械ばかりだ。

「ホホホホ、エリス様、これが新しい実験だ……使用人ですか？」

「今何だった！？ 実験台って言いかけなかったか！？」

「そうよ、とにかく調べてちょうだい」

「かつ、勘弁してくれ！ 何だこの変な爺！」

「ヨホホ？ 変な爺とは失礼ですな。私は、これでも研究者ですぞ」

「そう心配するな、ジーニアスは優秀な研究者だぞ」

なおさら嫌だったの！ こんなところで改造人間にされてたまるか！

「ホホホホ、ではこの装置に手をかざしてくださいませ」

「ど、どくなるんだよ」

「魔力計測装置です、悪魔の潜在的に持つ魔力を数値化する、私の発明品です。ホホホホホ」

その笑い方が恐すぎる……

ただ逃げられそうもない、とりあえず魔力を測るだけだったら何も問題はないだろう。

手をかざすと、ちょっとヒヤツとした。

「ホホホホホ、10530ですな」

「それってすごいのか？」

「平均的な悪魔の数値の100倍は出ております、優秀ですよ、ホホホホホ」

「ちなみに私は……なんだっけ、ジーニアス」

「エリス様は36万560でございます」

ほぼ35倍、そりゃ勝ち目ないな。

「うーん、それだけの魔力があるのに、庭掃除なんて勿体ないわよねー」

「そうですね、数値だけでしたらこの城内でも3番目の実力で
すし、ホホホホホ」

庭掃除は絶対嫌なんだけど、この流れだともっときつい仕事が回
ってくるっばいな。

「妙なモンができてるな」

「1000年前は無かったのか？」

「なかったな」

平和になって、技術は進歩したって事なのか。

「よし、決めた。あんた私の直属の家来にしてあげる」

「え……」

「光栄なことなのよ！ もっと喜びなさい」

そうは言っても、タナトスの話じゃ、タナトス本人と同じくらいに性格が最悪で、人使いも見るからに悪い魔王様なんだろ。その直属の家来って……

俺、生きて元の世界に帰れるのか？

「ホホホホホ、忙しいですぞ」

「そう、なんだろうな……」

「くれぐれも、死なないように」

「はは、まさか死ぬなんて事は」

「ホホホホホ」

マジでその笑い方恐いからやめてくれないかな。

「えっと、裕太。そんなに心配することないって、魔力が1万もあれば、私が本気で怒らない限り死んだりしないから」

それはつまり、本気で怒らせたなら、俺の命は無いということですね。

よし、気をつけることにしよう。

「とりあえず、買い物くらい行ってもいいけど、逃げたら殺すから。絶対ぶっ殺すから。気をつけてね」

「イ、イエッサー……」

おかしいな、外出の許可が下りたのに、あまり嬉しくないな。

とにかく、部屋から出ることにしよう。そしてせっかくだし買い物にでも行くことにしよう。

第6話・伝わらなくてもいい思い

「すごい……魔界ってすごいすぎる!」

「鼻血流しながら何言ってるやがるゴミくず。うぜえから手始めに視界から奪ってってやるのか?」

タナトスの暴言も、あまり気にならない。でも視界を奪うのはやめてくれ。

魔界の女性ってみんなレベルが高い、男は豚から犯罪者面まで揃っているのになんでだろう。

しかも結構きわどい服とか着てもう、やばい!

「ちつ、貧弱な野郎だ! 死ね! そして死ね!」

「2回も言うな!」

「うるせえ、てめえ魔王の自覚持てよ!」

「俺魔王じゃねえし」

「けっ! ……おい、これ見るボケ」

なぜこいつは普通に言えないんだろう。もう慣れてきたけど。

俺って魔界にもう違和感あまり感じないし、こいつの暴言にも慣れてくるし、結構適応能力があるのかもしれない。

「魔界最強の悪魔を決める、ロータウン武闘会! 八百長もあるよ。って書いてあるな」

そんな『ポロリもあるよ』みたいなノリで、武闘会にあるまじきことを……

優勝者は魔王エリス様への挑戦権って、絶対そんなモンいらねえよ。

「久しぶりに、血が騒ぐぜ……」

「ちよつと待て、お前の血液はここにはねえぞ？　つかすでに出ることで決定した感じで進めるな！　絶対出ないからな！」

「んだよ面白くねえ、このチキンやろう。賞品は魔王への挑戦権、魔王に勝てば金貨10枚、負ければ死。面白そうじゃねえか！」

「どこに面白い要素があった？」

「というか何でこんな大会が成立しているんだ？」

「普通に考えてエリス様に敵う悪魔なんて、そうそっぴないんだから、人数あつまらないだろ。」

「優勝すれば魔王への挑戦権、そんなもんいらん。」

「ん？　よくみれば2位以下にも賞金が出るみたいだな。」

「それにルールはトーナメントではなく、サバイバル。具体的には書いていないけど、広いステージで大人数でどんちやかやるみたいだ。」

「これって、不正とかがんばって、うまいこと2位になるってゲームじゃねえか？」

「面白いことは面白いなこれ、でも出場はやだ」

「はあー……ビビりは半殺しにして、崖から落とさねえと直らねえな」

「なに？ その具体的なバカは死ななきゃ〜みたいなの」

「出場しなきゃ、こうなっちまうという意味だ」

「何を言っても出ない」

「ちっ!」

戦いたくたしょうがないという魔王タナトスは無視することにして、俺は買い物をする。

しかし、普通のものしか売ってないよな。

こういうところは魔界というよりも、ほんとに人間界にある市場と同じ感じだ。

まあ肉や魚、野菜に果物。そういったものはあるわけで、いいことなんだが、なんかがっかりだ。

買わないけど、呪われたアクセサリーや、魔力の結晶でも売ってるのかと思っていたのに。

人は多い、そして良く話しかけられる。美人に。

だが二言目には「このつぼを買いませんか？」だったりする。さすがは詐欺師の町だ。まさかの路上で霊感商法。

「てめえは、何しに来てんだ？ 変なつぼがほしいのか？」

「そうじゃねえけど」

「ならとつとと帰ることだ、そして大会にエントリーだ」

「しねえよ」

とりあえずせっかく来ているから、何か買おう。せっかく大金もあることだし。

というか何か食べよう、なんか周りには飲食店が多いゾーンに来たみたいだし。

適当に、お店のドアを開ける。

「ごめんください」

「あア！？ ふざけてんのかてめえ！」

なんで！？

「なんだとこのやろっ！」

「ぶっ殺すぞ！」

「やってみろ！」

あ、喧嘩か……

こいつら何やってんだよ！

「ギャハハハ！ やれやれ！」

「黙れ」

「おおう？　なんでだよ、喧嘩はいいぜ」

「そんなのでめえだけだ、とにかく止めないと」

明らかに店員さんも困っている。客同士の間で喧嘩らしい。

ごつい男の悪魔が2人だ、1人は頭に長い角が生えている。もう1人は、顔の頬の辺りが爬虫類の鱗みたいになっていて、牙が生えているのが分かる。ワニかな……

そしてすぐ横でおろおろしている店員さんは、猫の耳にちっちゃな尖った歯が口からちよつと覗いている。顔も非常に可愛らしい。どっちの味方をするか、迷うまでも無い。

「や、やめたほうがいいんじゃないか？　迷惑だ」

どうやっても俺が勝つ、何をされても俺は負けない。

事実そうだと理解していても、こいつら外見が敵つすぎ、普通に恐い。

「なんだとコラア！　俺らが誰に迷惑かけたア！」

「そうだが、誰の迷惑でもねえよボケ！」

あれ？　今の今まで喧嘩してたのに、なんで団結して俺に突っかかってくんだよ。

「なあー！」

ワニ野郎が、なぜかネコミミの店員さんに同意を求める。お前ら、その人に一番迷惑かかってるんだよ！

というか、不細工な面を綺麗な女性に近づける行為は、俺の目の前では神が許しても許されん！

「誰が迷惑してるんだよ！」

どうやら、本当に誰が迷惑しているか分かっていないワニ野郎に、俺が答えを教えてやることにした。

床を、足で軽く蹴ると、俺の体は一気に前進し、ワニ野郎の目の前まで到達する。

そして俺は右のこぶしをぐっと固める。

「その人だよ」

「あ？ いつのまに……」

固めたこぶしを、ワニ野郎の顔面に叩き込む。硬い鱗に当たったが、俺はちつとも痛くは無い。

ワニ野郎は一直線に店内を進んで行って、窓を突き破って店外に転がり出た。

「てっ、てめえー！」

「お前はどつする、ここから飛ぶか、歩いて帰るか」

「……ちっ！」

角の生えた男は、とぼとぼ歩いて店の出口に向かう。レジできちつと代金を払う姿に、もはやさつきまでの迫力は無い。

「あ、ありがとうございます！」

「い、いやいい。それより窓ぶち破つてごめんなさい！」

深々と頭を下げるネコミミの店員さんに、俺は謝罪した。だって店ぶつ壊しちゃったし。

「そ、そんなこと。お店を守ってくれた方に……」

「大げさな、あんなのたいしたこと無いよ」

「でも何かお礼を……」

むしろ俺が修理費を出すべきなんじゃ……というかさっきのワニ野郎から修理費を出させるべきだったかな。

「いいぜ！ ビビリが直ってきたじゃねえか！ 動機が人助けと
いうのが納得いかねえが、あいつをぶん殴ったことは褒めてやる」

普通は逆だと思うんだけど……

ただこいつのような、暴力至上主義の悪魔にとってはこれで正しいだろう。

「いいってそんなの。じゃあ何か料理がほしい。元々この店には
そのために来たんだし」

「はい。もちろん御代は結構です」

「いや、出すけど……」

「ちょっとくらいお礼させてください！」

ネコミミの店員さんは、嬉しそうに耳をぴよぴよこ動かしながら、店の奥に入っていった。

やっぱりいいなあ、ネコミミも。基本美人が多い魔界だけど、可愛い系の子は少ないからな、癒される……

「しかし、なんでてめえはもっと欲をださねえ。向こうは勝手に礼をしたがってるんだぜ？」

「魔王の思考回路はわからねえよ……なんであんな可愛い子にそんなことができるんだ」

「はっ！ 俺もへたれでビビりでチキンな人間なんぞの考えなんて、わからねえよ！ つかわりたくもねえ！」

ひどい言われようだ……

でも人間と魔王は、確かに分かり合うことは不可能だろうと思う。どちらかが変わらないと。

考えてみれば、そんな関係の俺とタナトスが、同じ体同居している。というかタナトスが居候している状況なんだけど、よく成り立ってるな。

「お前、腹は減らねえのか？」

「減るわけねえ、俺は魂だけなんだぜ」

「そりゃそうか、魂が空腹なんて聞いたこと無いな」

まあ魂が俺の肩の上でふわふわしている状況も、前代未聞の非常事態なんだけどな。

タナトスと話すのは退屈はしないが、ストレスは溜まる。

一旦肩の上のこいつから意識は離し、店内をしてみる。入ってきたときにはあまり考えて店内を見る余裕が無かったが、結構お洒落な内装だ。

庶民的。入り辛いような敷居の高い店ではなく、しかし洒落ている。金が無い貧乏学生が、彼女と一緒に初めてのランチとかに来れるカフェだ。

ただ所々、ここは魔界である、というような装飾品もある。

その中でも人間界ではお目にかかれないのは、いろいろな色に光続けている水晶玉。

魔力とかが関係してるのかな。

従業員は、さっきのネコミミの方だけじゃなく、他にもいる。全員女の子だ、素晴らしい。

どの子も短いスカートで、とてもよろしい。やっぱり魔界は楽園なんだな。

「お待たせしました」

「いや待ってない、てか早っ」

まだ5分経ってないよ。

「おせえええ！」

マジで黙れ。魔王だからとか関係ない。

出てきたのは、サンドウィッチ。そしてコーヒーっぽい黒い飲み物。コーヒー、だよな？

サンドウィッチの中身は、トマトとレタス、それからハム？ かなり分厚いハムだがそんな感じだ。

とりあえず食ってみることにしよう。

「……うまい」

「ありがとうございます！」

何の肉は分からなかったけどうまい。
コーヒーも飲んでみよう。

「うん、うまい」

「良かったです」

両方とてもおいしいので、完食した。
ただコーヒーと思っていた飲み物は、コーヒーではない何かだった。

「えっと、いくら？ というか修理費も出さないといけないから……」

銀貨1枚で、足りるのか？
確か1枚が300万円くらいだから……余裕だな。窓の修理くらいできるはずだ。

ポケットに入れてある袋に手を伸ばす。そして中の銀貨を1枚、取り出そうとした。

だが、その俺の手をつかむ腕が後ろから伸びていた。

いてえ！ どんな握力？ 腕がつぶれそうなんだが……

「え、エリス様？ どうしてここに？」

「えっ！ え、エリス様ですか！？」

俺は座っているから、背中を気落ちの悪い汗で湿らせることしかできなかったが、ネコミミの店員さんは、ビックリして飛びのいて頭を下げていた。

やはり魔王は相当な権力者なんだな。俺も、もうすげえ怖い。

「裕太……買い物に行っても良いとは言ったけど……何を女を口説きにかかっているの！？ 死にたいの！？ というか殺す！」

「ちよっ！ 待って！ ほんと待ってください！ 誤解ですって、俺は口説こうなんてことはこれっぽっちも」

「……へえ、そんなこと言うんだ。さっきから、ずっとその子の顔ばっかり見てた奴が！」

「ち、ちがう！」

「違うんですけど。その通り！　なんて言ったら本気で殺されそう
うだ。」

「あんたやっぱり奴隷……家来としての心構えが分かってないわ。
本来ならここでぶつ殺すんだけど……やめておく。そのかわり、あ
んたこれに出なさい」

そういつて、エリス様はバッグからクルクルとまかれた紙の筒を
取り出し俺に突きつけた。

その紙は、町にもあちこちに張ってあったロータウン武闘会のチ
ラシだ。

「いやです」

「なつ！　あんた主の命令をなに普通に断ってるのよ！　とにか
くこれは命令だから。拒否権なし」

優勝してもエリス様に公開処刑されるだけだ、本来は絶対俺は出
場しない。

だが、出ないと未公開の場で惨殺されるようだ……

こうなったら本気で八百長でもなんでもして、2位になってやる！

「お！　覚悟を決めたみたいね」

「がんばってください！」

「ギヤハハハ！　いいぜ！　そういう目を待っていたぜ！」

皆、俺の決意を感じ応援してくれる。しかし俺の決意が正しく感じ取られているかは謎だ。

第7話・残念ながら……ここはいついっ場所

「はぁー」

「うぜーな、何回ため息つく気だよ！」

「武闘会、どうしよう」

結局エントリーの手続きは済ましてしまったのだ。

「てめえそんな簡単なことでため息なんかついてたのかよ、バカか？ 全員ぶっ飛ばせばいいだけだろ？」

やはり魔王の言うことは参考にならない。

いつそ危険でもしようかと考えても見たが、エリス様から棄権したらその場でぶち殺すと、ありがたくないお言葉をいただいでしまっているので無理だ。

エリス様の怒りになぜか触れた日の翌日である今日。俺はまだ部屋から出てない。

そんな俺の部屋に、ノックもせず、足音も立てずに誰かが入ってきた。

この城の天才発明家のジーニアスだ。爺だ。

「ホホホホ、お互い災難ですね」

「爺、お前も出るのか？」

「そんなところですよ」

俺はまだ、自分で言うのもなんだが強いから良いが、こんな爺まじで死ぬんじゃないか？

「ヨホホ、今失礼なこと考えておりませんでしたか？ ま、いいでしょう……お互い、当日はうまいことやりましょう」

「は？」

ホホホホホ、と相変わらずの不気味な笑い方をしながらジーニアスは部屋から出て行った。

『うまいことやりましたよ』だって？ 全力を尽くそうとかじゃなく？ やっぱりみんな八百長とか考えてるのか、というかそれだけの用だったのかよ。

「大会今日だろ？ いつまで部屋に籠ってんだよ！」

「……はぁー」

「うぜえな陰気やろう！ とつとつ控え室まで行きやがれ！」

やる気ゼロ、気合ゼロ。そんな俺を無理やり動かすタナトス、ほんと迷惑だ。

しかしこいつの言うことを無視し続けると、耳元で延々叫ばれノイローゼになる。仕方ないし、控え室に行こう。

会場は、城のすぐ横にある馬鹿でかい闘技場だ。

控え室は、実に妙な空間だ。これから戦う相手と、なぜこんなに話し合っているのか？ その答えはただ1つ、こいつらは取引をしているのだ。

「けつ、貧弱な奴らだ」

最初から全力で戦う気が無い参加者たちに、タナトスは悪態をついている。まあ見えないし聞こえてないんだけど。

「君も参加者ですね？」

控え室の椅子に座って、大人しくしていたら、真っ白な髪をした腰に剣をさしている男が声をかけてきた。

俺が何も答えずにいると、勝手に話し始める。

「私はゲニウス、実は私はこの武闘会、優勝を狙っています」

「は？」

俺は誰もが2位を狙う大会だとばかり思っていたが、こんなやつもいることは意外だ。

でもそんな奴と俺が手を組めば、もしかすると俺の2位は確定なんじゃ……

そうだ、そうなる。絶対にこいつを逃がすわけにはいかないな。

「協力していただきたい。共闘し、最後に私はあなたを倒すフリをします」

「マジで良いのか？」

「ふふ、私としてもこれ以上の取引は無い。私の目的は、最初から魔王エリス様と戦うことのみです」

「よしっ、手を組もう！」

「あああ!?! この軟弱野郎ども！」

取引成立だ、タナトスは反対らしいが、無視だ。

「私もあなたも、それぞれ味方以外の全ての参加者を倒せばいい」

「そうだな、最後には頼むぜ」

「こちらこそ」

やったぜ、2位の賞金獲得が決まった。

あとは、うっかりこいつも倒してしまって、優勝してしてしまうようなミスを犯さなければいい。

そして、武闘会開催の時間になる。

『レディースエーンド、ジェントルメーン。エリス様以外、誰も
楽しめない武闘会が、今始まります』

大会は、サバイバル方式で、トーナメントのように順番に戦うの
ではなく、障害物だらけのコロシウムに参加者全員詰め込んで、最
後の1人まで戦わせるという実にシンプルなルールだ。

もうシンプルすぎて、こんなの武闘会じゃねえ。
ただの殺し合いじゃないか。

打ち合わせどおりにやるためには、俺はゲニウス以外の全ての参
加者を倒さないといけないのだが……

俺は結構自身がある。

直前の控え室で、タナトスに聞かされた魔力の使い方というもの。
早速試してみることにしよう。

『よいスタート』

突然始まった。

もうちよい観客向けにいろいろ喋れよ。

「悪いな！ 真剣勝負だ！ お前には死んでもらギャアー！」

俺がタナトスから聞いたのは、魔力は今、俺の体を強化している
だけだが、魔力とは、体外に放出することができるということだ。
よつするにかめめ波的な技ができる。

今も早速使ってみた。殺さないように加減はしているが、これは
相当な威力らしい。

これはエリス様にもできる技で、エリス様の魔力はピンク色なのだが、俺……というかタナトスの魔力は黒っぽい紫色だった。なんか俺に襲い掛かろうとした奴がいたみたいだったけど、一発でどこかに飛んでいってしまった。

今度は魔力で自分の体をふわふわ浮かせる。

こんなことができるなら、魔界に来てすぐのときに地面に落下することも無かったのだが、どうもコントロールが難しい。

でも、垂直に上上がったっていくことは簡単だ。

「気 砲！」

名前を叫んだのは、俺の少年の心がそうさせただけであって、別に深い意味は無い。

手で作った四角形から、魔力を放出しただけだ。この技なら広範囲の敵に、殺すことは無いダメージを与えることができる。

「ぐああああ！　なんて野郎だ！」

一気に目の前の悪魔を殲滅。

「ギャハハハ！　悪魔がゴミのようだぜ！　おい！」

タナトス大爆笑。まあ今は俺もちょっと顔が綻んでいるだろう。

これめっちゃ楽しい。

参加者が男ばかりでよかった。さすがに綺麗な女の人がいるところに、こんなことはできないからな。

エリス様ならできるけど。

「あいつをやらねえと……2位は俺だあ！」

一直線に俺に向かってくる、剣を持った男が。いやー男でよかった、容赦が必要ない。

殺しはしないけど、さすがにそれはまずいから。

「すごい、パンチ！」

別に学園都市のナンバーセブンではなく、拳に魔力を乗せて、思い切り前方に飛ばすだけの技。ただ名前はぱくってみた。

これがどうも、俺には一番合う形なのか、すごい広範囲に攻撃でき、威力十分、さらに直撃した敵は上空高く舞い上がり落ちてくる。その光景に、タナトスも大爆笑だった。笑うつてのは違う気がするけど……

「化け物だ……なんて魔力だ……」

自分で作り出した状況ながら、地獄絵図になってしまった。

直接殴りあうのは、負けなくても抵抗があるが、こんな風に遠くから攻撃できるなら話は別だ。

恐がる要素が無い。

「すごいパンチはねえだろ。魔王パンチにしろ！」

「俺ももうちょっと別の名前のほうが、後々も使うときに良いとは思ってるけど、それはねえよ」

とりあえずネーミングについては保留にしよう。

「ホホホホ、すごいですねえ。まさかこれほどとは……」

ジーニアスだ、そういえばこの爺も参加するといっていたな。自分で言うのもなんだけど、よくアレだけの攻撃の嵐の中無事だったな、研究者のくせに。

「かなり数も減ったな」

「ヨホホ、私も敵でしたのう……どうでしょう、私はここで負けます。軽く、倒してください」

「いいぜ！ ぶつ殺せ！」

軽く。

タナトスには国語辞典で『軽く』の意味をよく調べてきて欲しい。

「分かった、いくぞ」

軽く、爺の腹に掌抵を打ち込む。

すると、演技が強すぎたのか、爺はその場に倒れこんだ。

「やべえ……やりすぎか？」

「おう、手加減しすぎだ」

『ええー、最後の1人となりましたので、武闘会終わりー。おめでとう裕太選手、そして安らかにお眠りください裕太選手』

最後の1人？ おめでとう？ あのバカな実況は何を言ってるんだ？

俺は絶対に巻き込まないようにした奴が1人いるんだ。最後に俺はそいつの攻撃で、わざと……

まさか？

「ホホホホ、おめでとうございます、裕太殿」

「てめえ……見事に騙しやがったな……」

そこに立ち上がったのは、よぼよぼの爺ジーニアスではなく、控え室で取引した白髪の男、ゲニウスだ。

確かにタナトスの言うとおりだった、手加減しすぎた。

こいつはあの一撃で、黄泉送りにすべきだった……というか、今から送る！

「殺す！」

「ホホホホ、お怒りになるのは分かります。しかしこの大会、八百長もありと公言されております故、ご容赦を、ホホホホ」

「……確かにそうだが！ 騙したな！」

「それはそうです、ここはロータウン、別名ライターゾーン。詐欺師の町ですぞ？ それに私は、元々は研究者などではなく詐欺師です」

そこまで言って、ジーニアスは一旦黙り、そしてジーニアスの体が緑色に光る。

次の瞬間、ゲニウスの姿からもとの爺の姿に戻った。

「私は変身能力がありまして」

「それ卑怯だろ……」

「いや、てめえが馬鹿なだけだ。こいつは戦いたい相手のことを、様をつけて呼んでやがったんだぜ？ 怪しまねえほうが悪いんだ」

「そんなのしらねえよ！」

タナトスって、もしかしたらすごい奴なのか？ 観察力ありすぎる。

「それと、姿を消すこともできません。では」

やばい！ と思ったが間に合わなかった。ジーニアスは一瞬光ると、透明になったのか消えたのか、とにかく俺の前から消えた。

立っていた場所に、魔力を打ち出してみるが、何も起こらない。

なんか聞こえて来る「ホホホホ」という笑い声が非常に不快だ。

『では、裕太選手は優勝して、魔王エリス様への挑戦権を手に入れました。よって、本人の意思に関係なく、今すぐこれを行使することとなります。』

魔王様入場。皆様拍手でお迎えください』

歓声、そしてすごい拍手。エリス様って、すげえ人望あったりするのか……

性格は俺の肩の上ですつと笑ってる、クソ魔王と同じで最悪なの

に。

「裕太ー！ …… 公開処刑、執行よ！」

エリス様が、闘技場の一番高いところにある、客席というか部屋。大きな窓があつて、そこから闘技場全体が見渡せるようになっていたのだ。エリス様は、そのでかい窓を体当たりでぶち破つて、俺の目の前に着地した。

『ワアー！』と観客は一気に沸いた。

しかし観客は知っているのだろうか……。エリス様の今の言葉は、パフォーマンズでもなんでもなく、本気で俺を殺る気であるという意思表示だと。

すでに宣戦布告されてるし。

第8話・湧き出る力

おい、どうなっている？ ものすごい速さで、エリス様が俺から遠ざかっていく。

……いや違う、俺が飛んで行っている。しかも空高く、空に垂直に飛んでいく。確かほんとにさっきまで、エリス様は俺から結構離れていたのに、認識すらできなかつたな……

「絶望すんじゃないやねえ！ 絶望は与えるものだ！ この魔王様から一方的にな！」

「いや、ありえねえよあれ……勝てるか？」

「今のは、足元から魔力で攻撃されたただけだ」

なるほど納得だ。

「いい具合に距離が取れたじゃねえか！ 控え室でやってた、恥ずかしいやつやれよ」

「……マジかよ」

やって良いならやつちやつよ？

飛びながら、右手と左手で、球をつかむようにして空間を作る。そしてそこに魔力を集中させる。少年の夢、ここに完全実現。

「かーめー ーめー……」

本家とは全く違う、悪に満ちた邪悪な紫の魔力が俺の手の中で巨大化し、光り輝く。

「波アー！」

直線軌道で、紫の光線がエリス様に突っ込んでいく。

今回の本気だ、まあエリス様なら絶対に死ぬなんてことは無いだろう。

そう思って放った渾身の一撃だったりするが、甘かった。

「へえー、これまた随分と……」

直撃する寸でのところで、エリス様は片腕を軽く振るった。

それだけで、俺の渾身の一撃は砕かれ、空气中に離散していつてしまう。

「軽いわね」

「マジで!?!」

「次は、こっちの番よ」

エリス様が、両腕を俺のほうに向ける。

その両腕の前に、ピンク色の巨大な魔力の球が出現し、なんだか今にも破裂しそうな状態で、キュインキュインと危なそうな音をさせている。

やべえ、死ぬ。あれを喰らったら死ぬ。

「ブローケンハート」

「なんだその物騒な名前！」

ピンク色の巨大な魔力の球が、一気に膨張し、さらに巨大化する。俺はそれが突っ込んでくるかと思っただけで、身構えたが、違った。魔力の球は、いくつもの小さな魔力の球に分かれて、闘技場内を飛び回っている。

そして収まりのいい定位置でもあるのか、だいたい一定の感覚で止まる。

俺の周りはピンク色の球だらけだ。

「ショット！」

エリス様は、新しく小さな魔力の球を指先に作り出し、飛ばした。俺のいる方向とは全く違う方向に。一体なんのつもりだろう。

飛ばされた魔力の球は、浮いていた魔力の球に当たり、ポンと軽快な音を鳴らした。

ぶつかった魔力の球はそこから動き出し、別の球に当たり、それが別の球に当たる。

「まさかこれ……」

「ああ、ビリヤードだな」

「どうしようか、避けきれそうも無い」

「……魔力で障壁を作れ！ 死ぬぞ！ まあ死んでも良いがな」

魔力の球の配置には意味があった。

全ての球が、隙間無く俺のほうへと飛んでくる。確かに配置に意味はあったのだが、ビリヤード風にする意味は分からないな。

と、冷静に分析している暇は無い。

とりあえず……バリアッ！

「魔力障壁？ 無駄よ、止めきれないわ」

「ひっ……！」

バリアは初弾で消し飛んでしまった。

残りの全ての魔力の球が俺に襲い掛かる。

「ぎゃあああー！」

全弾直撃、全身が悲鳴を上げている、感じた。なんだか威力はかなり分散されて、和らいでいるが、その分全身くまなく攻撃された。痛すぎて、起き上がることで精一杯だ。

「いつつつ……」

「もう終わりー？ まさかそんなことないわよねえ」

「む、無茶を……」

意識が遠ざかっていく……というより感覚が無くなっていく。視覚も聴覚も問題ないのに、体は動かない。というか勝手に動いている。

……は？ なんだこれ？ 声も出ないぞ。

「ククク、当然だ。こんなもんで終わるはずがねえ！」

あれ？ 俺の声……

「……？」

あまりの俺の口調の変化に、エリス様は頭にクエスチョンマークを浮かべる。

そりゃそうなる。口調が変わるところか、中身が丸ごと変わってるんだ。

どういうわけか、俺の体はタナトスの野郎にのっつけられている。

「ギヤーツハアー！ いいぜ！ 力が湧き出るようだ……！ エリス……絶望をくれてやるよ……！」

力が湧き出ると、俺、というかタナトスは言う。

これは別に嘘でもなんでもない、どういうわけか実際に巨大な魔力が俺の体から出ている。ただ、それよりも気になることがある。

さつきから、ブチブチと聞こえているのは、俺の筋肉が裂けてるんじゃないか？

あと、鼻やら口から血が吹き出てる気がするんだが……

「ちつ……貧弱な体だ……俺の魔力にあてられて、もうガタガタじゃねえか……」

マジで！？ 俺の体ダタガタなの？

「ふん、俺には関係ないことだがな。俺はただ、エリスのポケを公開処刑できればそれでいい」

なるほど会話はできるらしいな。

やはり、主導権が移り変わってしまったと考えるほうが良いみたいだ。ただなぜ？

俺の疑問、そして心配をよそに、タナトスはどんどん魔力を増大させる。

体からオーラのようにそれは噴出していて、地面を砕き、空気を震わせている。

「な、なんなのこの魔力……」

「ハッ！ わからねえか？」

タナトスは、俺の右手をエリス様に向ける。

すると俺の右の手のひらに、紫色の巨大な魔力の塊が出現した。形があるわけではなく、ただただ巨大な力の塊として、存在している。

「ギャハハハハ！ 終わりだ！」

魔力の塊は、一気に膨張し、エリス様に襲い掛かる。

エリス様はそれを、完全には避け切れなくも、直撃は避ける。

「くっ……どういうこと？」

「教えるわけがねえ！ ただお前は、全部ここにおいて消し飛ばす！」

タナトスがもう一度同じ事をしようとしたが、その前に、俺の口から大量の血が吹き出た。

ちよつと止まれ！ 俺がマジで死んでしまつから！

「……ちつ、もう歩くこともできねえとは情けねえ」

体がその場に崩れた。

多分、俺の体のどこかにガタがきて立っていることができなくなつたのだろつな。

てことは、俺の体そうとうやばいんじゃないか？

「はあ……はあ……終わり、ね」

「ぐつ……痛えええ！」

突然感覚が戻つた。そのこと自体はいいのだが、それにより感じていなかった痛みが俺にかかかつてくる。

全身肉離れになつたみたいだ……
しかも鼻血プラス吐血。

「公開処刑のつもりだつたのに……まさかここまで強いとは思つてなかつたわ」

エリス様が俺のほうへと歩いてくる。

……やべえ、殺される。

「まあ、ドサクサに紛れて殺そうかと思つてたけど、こつなつち

やったら殺せないわね」

「……そりゃ、良かった」

もつ心の底から。

「途中言動がおかしかった気もするけど……どうでもいいわ。その強さは褒めてあげる」

言動については、聞かれると非常に困る。これについても本当に良かった。

「だから私の家来として置いておいてあげる」

そこは御役御免としてもらったほうが嬉しいんだけど……贅沢は言わないでおこう。

しかし、なんだかさつきからエリス様の顔がぼやけてるな……

「……まあ話はあるんだけど、なんかあんたヤバそうだし、とりあえず医務室まで運ぶわ」

案外、エリス様って優しいのかもしれない。

はっ！　これがツンデレ？　恐るべきツンデレーション魔界まで？

などとバカみたいなことを考えた俺は、バカだ。

「それ、パス！」

「ちょ……まじ？」

エリス様は俺の襟首をつかんで、投げた。
俺の意識は、空中で途切れてしまった。

「シンデレレ！ シンデレレは無敵なり！」

夢か……

俺は何の夢を見てたんだ！？ 憶えてないな。

「……頭を打ちましたかの？ 私が分かりますか？」

「ああ、よく知ってる。今一番ぶっ殺したい男だ」

「ホホホホ。しかし、あなたの回復力には驚かされましたよ。
全身の腱が断裂していたというのに、もうほとんど治っておる」

確かに、闘技場では体中がものすごく痛かったのに、今はもう痛
みはない。やっぱりタナトスの魔力のおかげだろう。

「エリス様は？」

「ヨホホ、相当気に入られたようで……ずっとあなたの話をなさ
っておる」

「へえー」

「あと拷問器具の手配なども」

もう、帰りたい。

もちろんもとの世界に。家族に、友達に、
というか人間に会いた
い。

第9話：分かんねえ！

「いい天気だ……」

「けっ、そのうち二度と太陽を見れなくしてやる」

「なんてこと言いやがる！」

「どこの魔王だお前は……いや、この魔界の魔王だ。」

武闘会での主導権交代から、1日経った。幸い、それから俺の体を持っていかれることはない。

俺は今、城の外に出て、町に出ている。

エリス様が、昨日の武闘会で俺をそりやもうボコボコにしてくれたため、昨日の時点で俺は重症だった、らしい。今はピンピンしているから実感が無いが。

そのため、今日1日、のんびりしているとのことだった。

「こオの……ヤロー！」

「「は？」」

俺とタナトスが同時に声のしたほうに振り向く。

中学生、いや俺と同じ高校生ぐらいか。結構小柄な銀髪をつんつんにしている男が、俺のほうへと走ってくる。

そして右拳を俺の顔に突き出してきた。

それを俺は反射的にかわす。

そして腕をつかんで、軽くひねった。軽くのつもりなんだが、力が入りすぎていたか、地面に叩き伏せてしまい、男は思いつきり地面に顔を打ち付けた。

「ざまあねえ！ 誰に喧嘩売ってやがる！」

「ち、ちくしょう！」

「……誰？」

「俺の顔に見覚えが無いか！」

……向こうは俺を知ってるみたいだけど、全く記憶に無い。ただ声だけは、なんか聞いたことがあるんだよな……魔界に来てからどこかで聞いたのか、元の世界の誰かか。

「悪いけど、知らん」

「セドナだ！ まあ名乗ったことは無いんだが……闘技場で、見てるはずだ！」

闘技場……？ つまりは武闘会のとときだ。

あの時は、俺の攻撃で、ぎゃーとかうわぁーとか叫んでる声ばかりで、どれがどれとは分からなかったしなあ。

「俺は、優勝したかったんだ！」

「ええ！？ そんな人いたの？」

「いたんだよ！」

「ああー……」

ジーニアスのクソ爺に嵌められてさえないなければ。こいつと取引ができていれば、俺もひどい目には会わなかったし、こつやって怒鳴られることも無かったのか。

「というか、冷静に考えると、こいつのただの逆恨みじゃないか？」

「待て、お前は負けたことが悔しいのか？」

「それもある！ ただなあ……俺は、お前にムカついてるんだよ！ 魔王エリス様の直属のお付きをやってるお前が！」

「はあ！？ 譲ってやるが……」

「ふざけるなあー！」

確かに今のはちょっとふざけた発言だったな。

しかしエリス様って人望あるな。進んで家来になりたがる男がいるなんて。

「……俺は、元々はエリス様の直属の家来だったんだ」

「へえー」

「それなのに、突然クビになったんだ。少し前に。それで、今お前が直属の家来？ ……納得いくかあー！」

「ごもつともだ、別に俺がその状況だとしても全く怒らないけど。」

ただ不憫なものだな。俺みたいな忠誠心の無い奴が、なんだかんだで魔王に使えて、こんなに忠誠心にあふれてる奴が、クビになっちゃうんだから。

「まあ落ち着けて、俺暇だから、ちょっと町でも行こうぜ。ナンパでもしようぜ！」

「は……？ ふ、ふざけんな！ 俺はお前に怒ってるの！ なんてそいつとナンパなんかするんだよ！」

「……めんどくせえ奴だな……。裕太！ 殺せ……！」

お前が1番落ち着いてくれタナトス、それはまずいから。
どっただけ暴君だよ。

しかしエリス様。まさか本当に俺と交換みたいなノリで、こいつをクビにしたのか？

暴君の家来も暴君で、でもそれだと俺まで暴君になってしまうな。
気をつけよう。

「ふー、ひどい話だな」

「真面目にそう思ってるのかよ！」

「半分くらいは」

「ぬああー！ ムカつくな！ やっぱり、お前倒して俺がもう1度……。俺がお前より強いと証明してやる！」

セドナが体勢を低くして俺に突っ込んでくる。

なるほど、もともとエリス様が家来にただけあって、今まで魔界であった連中の中では2番目に速い。当然1番はエリス様だ。しかし、魔界での戦いにも目が慣れてきた。

その高さなら、膝が打ち込めることが分かる。

セドナの拳が俺に届く前に、膝を突き上げ、あごに直撃させる。

「ぐっ！」

「やめろって、俺は別にお前と戦う理由がねえよ」

「黙れ黙れ！ 俺にはあるんだよ！」

セドナは後ろに飛びのいて、両手をびたつとあわせ、指先を俺に向ける。

その体制になったのと、ほぼ同時に指先から細い光線が飛ぶ。

真っ赤に光るそれは、俺の丁度鳩尾に直撃した。

「げふっ………！ 吐く吐くっ！」

「うおおお！」

俺が口元を押さえると、がら空きの鳩尾にさらに2発3発と打ち込んでくる。

さすがに苦しい……

俺は4発目を、右手で弾き飛ばし、左手に魔力を集める。

武闘会でも使用した、『すごいパンチ』もとい『魔王パンチ』をセドナめがけて打ち込む。

ネーミングについては、タナトスがしつこかったので俺が折れた。そのかわり、技の名前を叫ぶような恥ずかしいことはしない。

「こはっー！」

「吐きそうになったじゃねえか……！」

俺の文句はおそらく聞こえていない。

セドナは俺の技で、道路をかなりの速さで転がっていつている。

「負けられないんだあー！」

熱血は嫌いじゃないけど、これ以上鳩尾にあんなもん打ち込まれたらさすがに朝食をリバーズしてしまう。

セドナには悪いが、終わらせる。

フルパワーの魔力を利き腕の右手に集めて、魔王パンチをする。魔力の衝撃波が、道路を削りながら直進する。

「な、んだ……これ？」

「やばっ！ 強すぎだ！」

「ギャハハハハ！」

やりすぎた、セドナ死ぬかも……

この歳で前科一犯？ 勘弁してくれ！

俺の願いは届かず、無情にも、俺の放った一撃はセドナもろとも

あたりの地面を削りながら遠くに飛く……

と思ったのだが、セドナはすごい力に押されて地面に埋まってしまった。

まあ状況一緒か。

「大丈夫か？」

「な、なんとか……げふっ」

気絶してしまったセドナを、俺は地面から引つ張り出し、病院が分からないので、とりあえず城に連れて行くことにした。

警備の悪魔は、幸い俺を魔界に来たときに、魔王の部屋まで案内した犯罪者面の男だったため、最初は俺の背負っているセドナを怪しんでいたが、あっさり通してくれた。

医務室に連れて行くと、ここでも運良く居たのがジーニアスだったため説明が楽だった。

まあぶっ殺せるという意味でも運が良かったのだが、とにかく俺がぶっ飛ばしたセドナの治療が優先だから我慢しよう。

「ホホホホ、知ってる顔だと思えば、彼ですか……エリス様があまりよい顔はされませぬと思うので、治療が済み次第、城から連れ出してください……」

「それだけど、なんでなんだ？」

「ヨホホ、お聞きになってましたか……」

「もしかして、俺が来たからか？」

「それは違います。……ヨホホ。詳しくは知らないんですがね」

「なんか、変？ 気のせいかな。」

しかし、セドナもキズの直りが早いな。

痣とかがどんどん消えていく。生傷なんか、もうほとんど治りかけている。

「もう治療は9割がた終わっております。目を覚ます前に、お連れだしいただきたい……」

「なんでだよ」

「ホホホホ、ですから詳しくは知らないんです」

こいつと2人きりの状況で目を覚まされるのも嫌なんだけどな。また同じことになりそうだな。

「しょうがないな。じゃあ連れてく。ありがとな、そんで死ね」

「ヨホホ……嫌われましたのう」

当たり前だ、賞金まるまる持って負け抜けしやがって。

俺は半殺しにされた上、負けてるから金貨も無しだ。

医務室から出る。

もっ見慣れたが、やはり広い廊下だ。まず天井が高い。

出口の方に体を向けると、丁度こちらにエトナ様が歩いてきていた。

丁度いい、聞いてみよう。

「なんで、そいつがここにいるの？」

俺が声を出すまえに、エトナ様が俺に話しかけてきた。それも、若干怒りを感じる。

「エリス様、こいつはどうして……」

「関係ない。さっさと連れ出して」

「……」

俺の言葉は、エリス様の言葉に遮られる。

あまりに冷たく、機械的な調子だった。これまでエリス様は確かに性格最悪で、良い印象とは言えなかったが、感情がストレートに表れていて、機械的とは真逆だったんだが。

それなのに、今の言葉に感情はほとんど無い。

「どうしました？ エリスさん」

エリス様の後ろから、真っ黒で長い髪の男が現れ、しばらくの沈黙を打ち壊した。

なんだか笑顔が無機質で、怖い。というかこの見晴らしの良い廊下のどこから出てきたんだ？

エリス様はその男からは見えない角度で、一瞬表情を歪ませた、ように見えた。だがすぐに表情を元に戻してエリス様は男に振り向く。

「なんでもない」

「そうですか」

「じゃ、とりあえず部屋まで案内するから」

エリス様と、ロン毛の男は俺の横を通り過ぎて行った。

……セドナって、ほんとどういう立場なんだ？
とうるかさっきの誰？ 分けわからねえ……

「あの野郎の面……」

「知り合いなのかタナトス？」

「ふん、知り合いなんてもんじゃねえ……俺が殺したはずの野郎だ」

「……はあ？ 生きてるじゃねえか」

「そこが腑に落ちねえ」

「人違いじゃねえのか？」

俺が言つと、こいつにしては珍しく黙り込んでしまつ。
今までどおりなら「分けわかんねえ！ ぶっ殺せ！」とでも言い
出しそうなんだが。
いろいろ分らないなあ……

第10話：俺の武器、それは良心

「おーい、目を覚ませえー」

とりあえず、セドナを担いだまま城の外まで出てきたんだが、どうしよう。

頬っぺたをぺちぺち叩いてみたが、起きない。

魔界での旅で、邪魔ながらも頼りにしていたタナトスは、城の中でロン毛の男を見てから考え込んでるし役に立たない。

「けっ！ 捨てとけそんなガキ」

「そつもいかねえだろ」

てめえには良心つてもものが無いのか？
まあ、無さそうだな。

「……んん……ああ！ てめえ！」

「恩人に向かっててめえかよ」

「うるさい！」

セドナは俺から飛びのくと、両手を合わせて指先を俺に向ける。まさか、あれをまた繰り返す気か？

「やめろ、次はほんとに捨てとくぞ？」

「……はあ……分かっただよ、お前は悪くないって事くらい」

「……」

まあ気持ちは分かるんだよな。

怒りの持つて行き場がなくなつて、誰かを悪者扱いしてしまう。

こいつもかわいそうな立場に居るよな……

だから相談くらい乗ってやってもいいな。

「でも、倒す！」

「えええ！？ 今反省とか……」

「してない！」

セドナは俺に殴りかかってくる。

だがその動きは、途中で中断され、セドナは立ち尽くし俺のほうをじーっと思ってくる。

一体どうしたんだ？

「……ダメだ、くそお……」

セドナは弱弱しくいうと、地面に崩れ落ちた。

「元気出させて、とりあえず町にナンパでも」

「いかねえよ！」

「冗談だ、飯でも食いに行こうぜ。奢るから」

お金はいっぱいあるからな。
タナトスははした金だと笑うが、銀貨3枚は大金だ。

セドナは俺の好意に、とりあえず頷き、一緒に町まで歩いていくことになった。

「また来てくださるなんて、ありがとうございます！」

「いやいや、君の居る場所ならどこにだって、何度でも行くよ」

可愛いネコミミ店員さんの居る店に俺は来た。

人を励ます店ではないっぽいけど、俺はこの店しか知らないし、こんなに可愛いネコミミ少女を見て、元気になる男はいないはず。

セドナは店に入ってからほとんど喋らず、黙々とコーヒーのような飲み物を飲んでる。

「そういえば、名前聞いてなかったね。俺は裕太、そんでこいつはセドナ」

「お友達ですか？」

「そんなとこ」

「そんなんですか。私はコロンです、よろしくお願いします」

コロンちゃんは、ぺこんと頭を下げる。

このネコミミ、当然だが頭に生えている。ぴよこぴよこ動くのが、素晴らしいとしか言いようがない。

「……………てめえのデートかよー！」

セドナが突然叫んだ。

「いや違うが」

「どこがだよー！」

「いやまあ、可愛い子でも見れば気分も優れるかと」

俺がそこまで言うと、セドナは立ち上がり俺の胸倉をつかみ上げた。

すごい顔だ。眉間にしわを寄せて、すごく怒っている。……………なん
で？

「俺を慰めようとしてくれてたんじゃねえの？」

「だから可愛い子でも見れば……………」

「表に出るオー！」

なんで？ マジでなんで？ 意味わからねえんだけど！

タナトスまでもが、怒るのを忘れて、唾然としている。何に対してセドナが怒ったのかわからん。

すぐ横のコロナちゃんも、怒りの原因が分かればなだめる事もできるだろうけど、それが分からないから、どうすることもできず立ち戻っている。

とにかく店の中では暴れられないので、セドナに引きずられて俺は外に出た。

コロナちゃんも店外までついてきた。別に来なくていいのに。

「お前は……俺が倒す！」

「いや、やっぱり分からねえ！」

「あの……私が、可愛くないからでしょうか……」

オドオドしながら、コロナちゃんが呟いた。

まさか！ そんなわけがない！

「いやっ！ 違う！ その……コロナさんは、可愛いから……」

語尾消滅気味でセドナが言った。

当然だ。もし可愛くないだなんて言ったならば、セドナを敵と認めteぶつ殺している。

「は、恥ずかしいこと言わすなあ……」

「お前が勝手に言ったただけだ」

「……」

セドナが両手を合わせて、指先から細い緑色の光線を飛ばして
る。

さっきと同様に鳩尾めがけて飛ぶそれを、俺は右手で払いのけ、
左手に魔力をためて魔王パンチ。命名魔王タナトスを放つ。

俺のパンチの衝撃波は、セドナに直撃し、セドナを吹き飛ばした。

「ぐっ……お前は！ エリス様選ばれたんだろうが！」

「そ、そうだが」

「じゃあしつかりしていやがれよ！」

空中から、セドナが光線を2発3発と俺に向かって連射する。

確かに速さはあるが、俺の前では威力がなさすぎる。
攻撃の全てを俺は、片手だけで払いのける。

「くそお！」

それでもセドナは光線を連射してくる。だが1発1発が荒いのか、
威力がまるでない。

手で払いのける必要も無い。俺の体に直撃し、全ての攻撃は砕け
散った。

「落ち着けて」

「これが落ち着いてられるか！」

「よく分からないんだって！ お前はなんで俺に突っかかって
くるんだよ」

「好きだからだよ！」

セドナは今度は片手に緑色の魔力を集めて、丸い魔力の塊を作った。ぶつかつたらかなり痛そうだ。

しかし、それより前に、セドナはなんて言った？

『好きだから？』

俺が！？ 気持ち悪っ！ そんなわけがない、じゃあコロんちゃん……ではないよな、あの2人は初めて会ったんだし。

じゃあまさか……エリス様？

……なるほど、納得した。エリス様のことを好きになる男がいるってところは、全く納得いかないが、こいつがこんなに俺に突つかかる理由は分かった。

「せつかく一緒に居る事ができるようになったのに……お前に取られて、納得行くか！」

セドナは魔力の塊を、俺に向かって投げつけた。
俺はそれを、避けようと思えば避けれたはずだ。でも、ちょっとショックで体が動かなかった。

しかし無情にも、直撃したそれは俺の体をほんの僅かに後退させるだけに終わり、大気に散った。

「当たり前だ、納得なんかするな！」

「……はあ！？」

俺の言葉にセドナは戸惑っているが、構わずに続ける。

「エリス様が、お前の好きな人なら、あきらめるな！俺が協力してやる、力づくで奪い取れ！」

俺のエリス様の家来という立場も、奪ってくれて構わない。
というか奪え。

「そ、それは俺にとってはありがたいけど……お前はそれでいいのか？」

「構わない、むしろ大歓迎！」

「？」

セドナは頭にクエスチョンマークを浮かべる。

あ、そうか。魔界では魔王の家来なんてのは名誉なことだったからな。自らその地位を手放したいだなんて思う奴はいないよな。

ただ成功したら俺はぶー太郎だな……このコロンちゃんのお店で雇ってもらおうかな。

……でも成功しないかもしれないな。

エリス様の態度も明らかに変だった。

このことは、こいつには言わないほうがいいな。

「ふん、どうするつもりか知らねえが、もしかしたら相当面倒な山かも知れねえぜ……」

「なんだタナトス、まともに喋ったと思えば物騒な……」

「けっ！」

こいつの態度もなんか変なんだよなあ……

「何をしようとしてめえの勝手だが、城に居やがったクソロン毛が深く関わってくるようなら、一応気をつけやがれ」

「お前が殺したっていう奴か……」

「ああそうだ。まあめえの、良心だなんていうクソの役にもたたんものに付き合うつもりはねえ！ 勝手にしやがれ」

良心がクソの役にもたないって……まあそうかもしれないけど。俺は人間だから、良心は絶対に捨てるつもりはない。

「セドナ、エリス様が好きなんだな？」

「お、おう」

「じゃあかんばれ！ 協力する！」

「お、おう！ なんかありがとうな、後いろいろ悪かった……」

「気にするな」

俺は、こういう熱血な奴は嫌いじゃないな。応援したくなる。なんせ俺にくつついてやがるふわふわ魔王は、おそろしく応援しがいのないやつだからな。

セドナのことを応援すると俺は約束し、店内で料理を一緒に食べ、約束通り奢って、そこで別れて俺は城まで帰ることにした。

第11話：急がず焦らず、これ基本

「エリス様」

俺は、エリス様の部屋に来ている。目的は、セドナのこと、そしてあのロン毛の男の事を聞くことだ。

「くだらないことを聞いたら、頭に風穴開けるわよ」

「今日のご飯はイタァ！」

「実際にくだらないわ、ほんとにそれ聞きに来たの？」

俺の額に、エリス様のでこピンが打ち込まれた。しかしでこピンで、俺の体が後退しそうになるとは、エリス様恐るべしだ。

「えっと……ぶつちやけセドナのことが好きなんですかつ、髪が！ ちよつと引つ張らないでくださいっ！ いたたた！」

「それもくだらない。マジで死にたいの？」

「ご、ごめんなさい！ その危ないの下ろしてくださいっ！」

「私の指先が危ないって言うわけ？」

核ミサイルの発射スイッチより危ないっての。

その指先からどれほどえぐいエネルギーの塊が、放出されてしまふと思ってるんだ！

「えっと、あのロン毛の男は誰だったんですか？」

「ああ……アレス」

「誰？」

「話せば長くなるし……とりあえず仕事頼むわ」

「いや、流れるにおかしく、無いですね！ その指先下ろしてください」

「私にここまで態度が悪い奴って初めてだわ」

「どこがだ、敬語使ってるし、様付けなんだぞ？」

「まあいいわ。とりあえず、家来としての仕事をしてもらおう」

「なにを？」

「買い物」

「ただのパシリじゃないか……」

「全くだぜ！ 仮にも魔王様であるこの俺までもが、くだらない仕事に付き合う羽目になるんだ。ゆるせねえぜ！」

俺も正直、なぜそんなことを。とも思っただけど、エリス様の指が俺に向けられているのが恐くてしょうがないから、ここはパシリでも何でもやらせてもらおう。

「魔法薬を買ってきて。メモは渡すから、それを見せればいいし、バカのアンタでもそんなくらいできるでしょ」

エリス様は、紙とペンを取り出すと、さらさらと何かを書く。書いてあることは意味不明だ。

「町の一番南にある薬屋まで行ってきて」

「遠い……」

普通に歩けば、2時間はかかるかな……もっとかかるかもしれない。

飛んでいけば絶対に10分かないだろうけど。

まあちゃちゃっと飛んでいって、ちゃちゃっと飛んで帰ってくればいいか。

「それと薬は、衝撃がかかると爆発するから、丁寧に扱うように」

「そ、そんな劇物？」

「あんたもろとも町が消し飛びかねないから、注意するように」

なんでそんな危なすぎる薬を、町の薬局においでるんだよ！

というかそれ薬じゃないだろ！薬物ではあるかもしれないけど、人体に入れるものじゃないよね！それ！

……まあ、行きだけでも高速で移動できるだけましか。

「じゃあ、行ってきますわ」

「帰ってきたら、ぶっかけてやる！」

恐いこと言うなよ、それやってもエリス様は無事かもしれないけど………

とりあえず、城から出て、南の方角に向く。

南の方は、建物が低くなっていく。一発でポーンと飛んでいけるかもしれない。

「よし！ 八艘飛びなんてもんじゃないぞ……義経越えだな」

つか人類の限界なんか遙か後ろに置き去りにしてるけどな。

足に魔力を集中し、一気に飛び跳ねる。

よし、イメージできた。早速やってみるか。

ジャンプと同時に魔力爆発、するとアスファルトっぽい地面が思いつきりめくれ上がった。

俺の体は、あっという間に人が米粒くらいにしか見えない高さまで上がっている。

あ、角度悪いな。このままじゃその辺の建物の屋根に落ちこちる。どうしようか、ドラゴンールみたいにかめめ波で飛べたりしないかな。

「というかやべえよ、考えてる時間ねえよ。とりあえず……」

「民家全部消せ！　そうすりゃ一発平地に」

「そういう心配じゃねえよ！　何かとお前は破壊したがるな」

「はあ！？　魔王舐めんなよ！　壊さなくて何が魔王だ！　やめちまえ！」

「やめれるなら、今すぐやめるが」

しまった、とうとう本気でまずい。

このアホと口論している暇など無かった。こうなったら一か八か、魔力を放出して反動で飛ぶしかない！

手のひらに魔力集中……そして打ち出す。

「ハア！」

魔力が後方にすごい勢いで放出される。そして空中の俺は、狙い通りに背中かから目的地に向かってすごい速さで進んでいく。

そして一気に俺との距離が離れていく魔力の塊は、このあたりで、最も高さのある建物である、エリス様の城の壁に大穴を開けた。

俺、知らね。

「やべえ……前見えない」

「心配すんな、俺が的確に指示をやるっ」

「マジか？　忍びねえな」

「構わんぜ、さて、このままで問題ねえな。むしろ加速しろ、もう一発だ」

「おお、ハア！」

もう一発、今度は城には当たらないように……したんだけど屋根を削りながら飛んでいってしまった。

そして俺の体は一気に加速、このまま薬屋まであつという間だらうな。

「よし！ このスピードなら、ぶち破れる！」

「……はあ！？ ちょっと待てよ！ え？ 壁に向かっているのか？」

「おい舌嚙むぞ」

言つの遅すぎ、たった今壁ぶち破って何か建物の中に突入してしまっただけだ。

やべえ、絶対怒られるじゃねえか！

というかここは、民家じゃないな。

何か店かな。周りには色とりどりの、というか目がちかちかする色の壺がたくさん置かれている。

「なんだここ？」

「ホホホホホ」

「ああ？ 爺！ こんなところで何してやがる！」

「ヨホホ、何をといわれても、買い物ですが？」

壺か？ この趣味の悪い目がちかちかする壺を買うのか？

「へいらっしやい！ お客さん、こりやまた派手な来店だな」

「あ、どうもすみません……すし屋？ いや壺屋だよなあ」

「なに言ってるんだ？ ここは薬屋だぜ」

「ホホホホ、エリス様のおつかいではなかったのですか？」

「誰も薬屋だと思わないぞ……ま、いいけど」

とりあえずポケットから紙を取り出して、板前風薬屋店長に渡す。

店長は、紙を見ると、なぜか顔をしかめた。

まあ心当たりバリバリあるけどな。なんせ爆発すれば辺りを無に帰すような劇物なんだからな。

「んなもん何に使うんだ……？」

「売ってくれるのか？」

「そりゃ売るのは構わんけど……」

店長のおっさんは紙をポケットにねじ込むと、店の奥へと歩いて

いった。

そして少しすると、フラスコになぞの輝く液体を入れたものを持ってきた。

ううむ、劇薬っぽい毒々しさがあるな………なんというか、青白いというか、よく分からん光り方をしている。

そしてそれを、乱暴にカウンターに置いた。

「危ねえ！ 何してんだおっさん！」

「？ これはガラス製じゃないぜ」

「そこじゃねえ！」

おっさんは何のことか分からないという風な顔をしている。これ
が取り扱いに長けたプロと、素人の差なのか？

「これは魔王様のおつかいなんだろ？ じゃあ御代はいらねえ、
さっさと持ち帰りな、首が飛ぶぜ？」

ははっ、とおっさんは笑いながら言う。

冗談だと思うけど、洒落になつてねえよおっさん……

俺は慎重にフラスコを持ち上げ、ゆっくりと店外に出た。

そしてゆっくり、ゆっくりと城の方へと歩き始めた。

「てめえビビリ過ぎだ、遅え！ 亀か？ てめえは亀なのか？
だからビビリでのるまなのか？」

「うるせえよ、亀はのろいかも知れんが、ビビリは関係ねえよ。
つーか亀じゃねえ」

ダメだ、怒鳴ったら爆発しそうだ……

なんで薬屋のおっさんは、あんなに適当に扱えたんだ？ もしかしたら多少のことなら大丈夫なのかもしれないが、もしダメだったら……

と、ネガティブ気味な俺の背中に衝撃、誰かがぶつかったらしい。
この、やるじ……

「てめえどこ見て」ぶつかってんじゃねえよ！ 死にてえのかア
」！

ぶつかってきたのは、柄の悪そうな角の生えた悪魔だったんだが、俺の忠告を素直に聞き入れて後ろに下がった。

それでいい、今戦うなんてのは御免だ。戦うのはいつだって嫌だが、今の状況では両方死ぬだけだ。

「よし、大丈夫……。ゆっくり、ゆっくり……」

「ちっ！ 日が暮れんぞ？」

何だっていい、俺はゆっくりと城を目指す。

第12話：2つの闘い

「なんだこりゃ……」

魔王エリスに淡い思いをよせる、魔王の専属の家来としての経験を持つ悪魔であるセドナは、現在城の前にいる。

目的は1つ、エリスに会うためだ。

そしてその行動に至るには、ある人間の一言があった。

だがセドナは城の前に立ち尽くしている。別に彼が怖気づいたわけではない。彼は今でも好意を寄せる彼女を奪い取る気にいる。

ただ城の前に彼が到達したのと同時に、城の壁に穴が開いたのだ。これは、ある人間によつて偶然起こってしまったもので、城の外からの魔力による攻撃のせいなのだが、彼は勘違いをする。そして、その勘違いは彼の行動を大きく変えてしまった。

「城の中で何が……」

セドナは城に乗り込むことを決意する。

この決意は、純粹に好きな人を守るという、実に美しい動機によるものである。

しかし状況は、外部から偶然城の壁に穴が開いたただで、平常どおり時間が流れている王宮への殴り込みを決意したただの愚かな悪魔でしかない。

「エリス様……」

セドナは強くは無い、しかし決して弱いわけではない。

そもそも尋常ではない魔力を持つ魔王や、魔力を元々は持たない

が、歴史にも名の残る魔王の魔力を僅かながら体にやどしているような人間には敵わないが、元々魔王の御つきなどという、一般の悪魔ではつくことができない職についていた彼の魔力は、城の中を徘徊する警備の悪魔などでは抑えきれないレベルのものだ。

そんな悪魔が単身で乗り込んでくる。

当然城の中は、偶然大穴が開いたことよりも遥かに大きなパニツクとなる。

「絶対に、俺がエリス様を守る」

セドナは走り出した。城壁を飛び越え、一気に王宮の敷地内に侵入する。

「な、なんだお前は!？」

「どけ! 俺はエリス様に会うんだ!」

「! それはならん! 部外者は今」

「ならば、倒す!」

セドナは指先を警備の悪魔に向け、緑色に光る光線を放つ。

光線は警備の悪魔の腹に直撃し、その体を張るか後方の城の壁まで吹き飛ばした。

セドナはさらに進む。

門の前には確実に警備がいることを彼は知っている。だから彼は、足に魔力を集め、2階の窓まで飛んだ。

そして何の躊躇も無く、ガラスをその体で打ち破り、城内に進入する。

彼が飛び込んだのは、大ホール。最も広い部屋だ。だがイベントなどでしか使われないこの部屋は、常時は誰もいない。

「よし……」

セドナはゆっくりと大ホールの出入り口である扉まで歩いていき、ドアノブに手をかけた。

そして慎重に扉を開ける。

その扉の先は、なぜか空が見える。そして山が見える。ある人間が一撃であけた穴が丁度一直線上に存在した。

ほんとにこの場で何かがあったのか……？ それにしては静かすぎるな……

「いたぞっ！ 侵入者だ！」

「やばっ！」

扉から顔を出していたセドナの前方が、10人を超える警備の悪魔に塞がれる。

大ホールに押し込まれれば出口は窓しかないため、状況は最悪といえた。セドナはすでに袋のねずみである。

セドナは仕方なく、大ホールの中に後退した。

そして魔力を足に集中させて、全力で後方に飛び、できる限りの距離をとった。

「いつでも来い……」

セドナは体勢を落とし、片手を扉の方に向ける。

そして手のひらに魔力を集中させた。セドナという1人の男としての極限の大きさの魔力がその手のひらに集まっている。

城内に侵入者としてセドナが入ってきている今、彼が奪い取ろうとしている女性である魔王エリスは、城内で最も高い場所にある部屋で、アレスというロン毛の男と2人きりの状況だ。

もちろん2人は城内の異変には気づいている。

「騒がしいですね、放っておいていいのですか？ エリスさん」

「いいのよ、どうせ大した事じゃないわ」

しかしこの城の所有者ではないアレスはそれほど気にも留めていない。

そしてこの城の所有者であるエリスは、もっと無関心だ。

「それで、考えてくれましたか？」

「……考えるも何も」

「そう、あなたに迷う必要性も、そして迷っている時間も無い」

ここまでずっと、無機質な笑みを浮かべていたアレスの表情が、この言葉を放った瞬間、邪悪なそれに変わった。

その変化に起因してか、それともその言葉によるものか、エリスも表情を若干強張らせる。

それが可笑しいとでも言うように、アレスの笑みは深く、より邪悪さを増していく。

「あまりのんびりされても、お互いに損をするだけ」

「……」

エリスはただ沈黙する。

その沈黙さえも可笑しいと、アレスの笑みはまさに魔王のそれとなっていた。

セドナが大ホールに後退して、距離をとるまでに要した時間は約3秒。

それから警備の悪魔達が一気に突入してくるまでには約5秒の間があった。その間に、セドナはすでに攻撃の準備を完了させている。

開け放たれた扉の向こうから、警備の悪魔たちは一斉に突入してくる。

そうなることがセドナの狙いであり、彼らの敗因となることは、

この時点で、自らよりも強大な魔力を持つものとの本気の戦闘が初めてである彼らには想像もできていなかった。

一斉に狭い扉をくぐったため、警備の悪魔たちは一箇所にまとまっている。

そこを一すじの、扉にあわせた太さの緑色の光線が通過していった。

その光線はこれまでにセドナが使っていた、被弾すれば衝撃とともに拡散するようなものではなく、被弾したものを押し戻すような性質を持っていた。

警備の悪魔たちは、光線にまとめて押し出され、そして部屋の扉の一直線上にある大穴から光線とともに城外へ飛ばされた。

ある程度標的が城から離れたのを確認すると、セドナは光線の性質を変える。

標的を強い衝撃で遠くまで弾き飛ばすように。

警備の悪魔たちはかなり離れたところまで飛ばされていった。

「絶対諦めねえぞ！」

セドナは大ホールを飛び出し、階段を駆け上がっていった。

セドナが階段を上り始めたのと同時。

エリスとアレスのいる部屋の空気が、一気に不穏なものに変わっていた。

「アレス……！ あんたね、これ以上私にくだらないことを言ったら殺すわよ？」

「フフフ、できますか、あなたに」

アレスが言い終わると、エリスが動き出すのは同時だった。というよりはエリスが若干フライングである。

そしてエリスがアレスの顔面に拳をねじ込む動作に入るまでは、まさに一瞬の出来事だった。

しかしアレスの行動はさらに速い。

エリスの拳がアレスの顔面に直撃しようかという所で、彼は動き出し、エリスの拳が頬に触れる前に、エリスの顔面にカウンターパンチを打ち込んでいた。

エリスの体は一気に後方に飛ばされ、壁に激突する。

「くっ……やってくれるわね」

「分かりませんか？ あなたに私と闘う権利は無い。一方的に殺されるだけですよ」

「やってみなければ分からないわよ！」

エリスの言葉は強がり以外の何ものでもない。アレスとエリスの力の差は歴然だ。

しかしそれでも、エリスは闘う以外の選択肢を選ぶことはできない。

だからといってエリスは諦めたわけではない。

エリスは左手をアレスに向ける。

そして持てる最大の魔力を集中させ、慎重に狙いを定める。

アレスは左手を自分に向けるエリスが、自分への攻撃を体勢に入っていることは当然理解している。

しかし一歩も動こうとはしない。それどころか完全に手を下げ、防御をする気すらも無い。

そんなアレスにピンク色の光線が発射される。莫大なエリスの持つ魔力を小さく圧縮したそれは、部屋中をピンク色にしてしまうほどの光を放っていた。

だがそれを目の前にしてもなお、アレスは全く動かない。

エリスの攻撃は、無防備な状態のアレスに直撃した。

「フッフ、無駄ですよ」

アレスにダメージを受けた様子は無い。それどころか、服に汚れの1つすら見当たらない。

それは異常だった。エリスの攻撃は、紛れも無い全力の一撃であり、地面を深く抉りクレーターを作るような隕石程度の破壊力は持っていた。

普通隕石が直撃して、服に汚れの1つもつかないことなどあるわけが無いのだ。

「今の一撃は素晴らしかったですよ……あなたのご主人様に火傷を負わせるくらいに魔力がありました。しかし、私には通用しません。この意味が分かりますね？」

「あ……あいつより強いっていうの……？」

「そういうわけです。まあ間抜けな彼は、どこかの連中にやられたようで、決着をつけることは敵いませんが……。きっと私を殺し損ねたことを後悔することとなったでしょうね」

「……ぶっ」

「どうしました？ 恐怖でおかしく「あははははっ！ そんなわけじゃないじゃない！」

エリスは心のそこから笑っていた。

アレスの言葉が可笑しくてならなかったのだ。

「あんたがああの野郎に勝てるって？ 無理に決まってるわよ」

エリスの言葉に、アレスは初めて笑みを崩した。

彼の表情は、無機質で機械的とは程遠い、しかし常人離れた悪意に満ちる魔王のような邪悪な笑みでもなく、1つのまともな精神を持つ個体としての怒りに満ちたものになった。

しかしすぐにまた、彼は笑みを浮かべる。

「……では、あなたの体に教えてあげましょう」

アレスはゆつくりと臨戦態勢に入った。

エリスも身構える。魔王であるとはいえ、自分よりも遙かに大きな力を持つ存在に対して恐怖を消し去ることはできない。自然とその構えは硬くなっている。

2人が本当に闘い始めようとする今、セドナが階段を上り始めてから約2分。

彼が直線で最上階を目指していれば、間に合うには十分な時間が経っている。

アレスが邪悪な笑みとともに、その拳を目にも止まらぬ速さでエリスの顔面に叩き込もうかという瞬間、部屋の扉が吹き飛んだ。

そこにはただ1つの想いで動き続けていた、勘違いヒーローが立っていた。

「やめろこの野郎！」

彼の怒声で、アレスが動きを止めた。

といつても止まっていたのは一瞬にも満たない。次の瞬間には、その拳の標的が変わっていたというだけのことだ。

「セドナっ！」

エリスが名を呼ぶのと、ヒーローがその場からアレスの一撃の下に退場するのはほぼ同時。

ではなく、アレスの完全なフライングだった。

壁という壁を突き破りながら、セドナは城内を一直線に飛んでいく。

なんださっきのは……全く見えなかった。それに威力も尋常じゃない。

体が一発でガタガタだ、かつこ悪いな、助けに行つたのに一撃かよ……

俺って弱いな、結局何もできない。あのエリス様の新しい御つきの奴にも、ただ無意味に八つ当たりしかできなかったし、逆に応援されて、バカみてえ。

ここでも簡単に負けちまう、エリス様を守るなんて……今思えば俺ってエリス様よりも弱いんだよな……

ちくしょう……

この際誰だっていい……

もう死んでもいい……

俺に力を……

「おい！ マジで日が暮れんぞ！」

「うるせえ……死にたくないんだよ……というかもう城見えてるから……」

「城なんざ最初から見えてるっつーの！ バカか？ ボケか？
亀か!？」

「ちよつと黙れ……落としたらどうする」

「んなもん城に投げろ！」

「これ以上城を壊してたまるか！」

ああ……だるい。

さすがに日が暮れるなんて事は絶対無いが、小走りで30分くらいかなあ……

というかなんで突然こんな危ないものを、俺に買いに行かせたんだ？ こんなもの本当に使い道あるのかなあ。

仕方がない、揺らさないように、ゆっくり、焦らず、走るか……
じゃないとタナトスがうるさすぎて、逆に危ない。

第13話：戦闘

立てる、歩ける。闘える！

セドナがアレスの一撃をまともに受け、地に伏していたのは時間
にすれば1分にも満たない。

しかし変化は劇的だった。

満身創痍であるはずのその体からあふれ出る魔力は、健康体である時のそれを遥かに上回る巨大なものだ。セドナはその理屈を全く理解することができなかったが、今のセドナにとって経緯はどうでも良かった。

ただ立ち上がって、闘えるという結果1つで、セドナの目にはもう守ると決めた女性と、倒すべき敵しか見えていなかった。

そしてその手には、突如現れた巨大な剣が握られているが、セドナの体はそれに違和感を覚えることなく対応し、剣を両手に持つて構える。

一歩踏み込む。その一歩は、数10メートル離れた位置の宿敵の命にまで容易に届く一歩だった。

セドナは何の容赦もなく、目の前の宿敵アレスに剣を振り下ろした。

アレスがそれに反応したのは、刃がその首を切り下ろした後だった。

「っ！？ なに……が……」

痛みを感じることはなかった。

アレスは突如回りだした視界に、困惑し、声を出そうとしたが、その口から大量の血があふれ出しその言葉を止める。

そこでようやく気づく。首を切断されたと。

だがアレスにとっては、その首が切断されたという事実は意識の遠くに置いてしまってもいいような些細なことだった。

問題は、切り落としたセドナという男。そして、その手に握られている巨大な剣だ。

「ふ……見つけ、ましたよ……」

アレスの切り落とされた首、そして残された胴体が、赤や青、緑や紫などの色とりどりの炎に包まれて燃え上がった。

セドナの攻撃により発火したわけではない。

アレスの体が自ら発火しているのだ。

炎は大きさを増し、アレスの体と首は完全に炎に包まれた。

炎はさらに多くなっていき、その輝きを増していく。

そしてある程度の大きさになった時に、それは形を変えた。胴体から突出した炎は、鳥の翼のそれだった。

「それが、正体か」

「フフフ……」

セドナの問いに、宙に浮き上がったアレスの首が答える。

「こちらのセリフですよ。まさかあなたがそれを持っていたとは
首は体とつながった。

完全な姿に戻ったアレスは、七色の炎に包まれ、翼を生やしている。

「何のことだ？」

「フッフ、実物を持ち出しておいてとぼけるとは。余裕ですか？」

アレスは余裕の笑みを作ったまま、巨大な炎の羽をセドナにたたきつけた。

セドナはその一撃に床の上を転がったが、起き上がり、反撃する。
両手で持たれた巨大な剣が炎の翼を切り裂く。

だがアレスは余裕だった。

翼をいくら斬られたところでダメージは無いのだ。炎はまた大きくなり、あっという間に翼は再生する。

「無意味ですよ、私は不死身ですから……大人しくその剣を」

アレスの言葉はそこで中断させられる。

アレスの首が再び切断され、宙を舞う。だが床に落ちることはなく、首はその場に浮遊する。

「だから、無駄……」

首を飛ばされようと崩れなかった笑みが、初めて焦りの色を浮か

べる。

七色の炎に包まれていた首の切断面から、真っ黒な炎が七色の炎ごと首を焼き尽くそうとしているのだ。

「何度斬ってもつながるなら、焼き尽くすまでだ」

セドナは剣の切っ先をアレスに向けた。

その瞬間、切っ先に小さな黒い炎がともった。

そして、炎は一瞬で巨大化し、切っ先からアレスに向けて一直線に放たれ、アレスの首と体をまとめて巻き込みながら生き物のように城の壁を突き破り進んでいく。

通り道にはただ真っ黒な炎の軌跡だけが残った。

「セドナ……」

ずっと声が出なかったエリスが、ようやく声を出した。

「エリス様を助けに来ました。俺が絶対に守ります！」

「……今すぐ逃げなさい、遠くに」

「え？」

その言葉は、全く予測していなかったものだった。

敵を倒し、エリス様を助けた今、もう一度一緒にこの城で、彼は彼女を守り続けることができると思っていたのだ。

「なんで、ですか……？」

セドナは頭が真っ白になっていた。

故に、真正面から迫る脅威に全く反応することができなかった。

七色の巨大な翼が、セドナを吹き飛ばした。

「じふっ……！」

セドナは肺の空気を全て吐き出し、瞬間的酸欠に陥る。

身動きの取れなくなつたところに、更なる追撃が襲い掛かる。

容赦なく巨大な羽がセドナを2発3発と襲つた。

「残念、焼き尽くしても無駄ですよ」

「な、なぜ……」

「たとえ灰になろうと死にませんよ、過去にはこんなものではありません
まないレベルまでやられてますので」

「くそっ……だつたらそれ以上に……」

「待てっ！」

エリスが立ち上がり、アレスの前に立ちはだかつた。

「私があんたを倒す」

「無理です、大人しくしていればあなたを殺すことはありません
よ。だからそこで……」

アレスがエリスの言葉を最後まで待たずに、炎に包まれたその体めがけて、全力の魔力によるピンク色の光線を容赦なく打ち込む。そしてぐらついたその体に、さらに追撃する。

顔面を魔力で固めた拳で殴り、ノーガードのボディーに魔力の塊を打ち込んだ。

アレスの体は後ろの壁に激突する。

さらにエリスはその体を押し込み、壁を突き破らせる。だがそこで、さらなる追撃をしようと構えていた細い腕は、アレスの腕に捕まった。

「……いいでしょう、死にたいのならば、殺しましょう」

アレスの体を包む炎がさらに巨大化し、羽が城の天井を突き破った。

「なんか城から出てる！ 誰だ！ 城を壊した輩は！」

「てめえだてめえ」

「それはノーカウントだよ！ あの羽みたいなのなんだよ！」

「……ああ……どっかで見えたような……」

ヤバイなあ、非常にヤバイ。
もうちよいゆっくり帰ってもいいかな、巻き込まれるのなんて絶
対御免だし。

パリーン！

「ぐえっ！ いたっ！ なに！？」

「前危ないぞ」

「遅い！ というかなんかパリンってヒョワアアア！」

なぜか手の中が少し軽くなった。

そして地面に落ちるプラスチック片、そして眼前には怪しく光る
謎の液体。それも俺に向かって来ているような……

「死ぬうう！」

咄嗟に俺はしゃがんだ、しかし全身にぶつかかった。

あ……ここで俺の人生終わりですか……

……なんか痛くも痒くもないし、爆発もしないな。

これはどういふことだろう。

「生きてるな……」

「死ねばよかったのによ」

「……」

「……」

俺は肩の上のタナトスを一度手で握りつぶしてから、足に魔力を集中させ、城まで飛んだ。

そして城の近くまで飛んできたところで、突然視界が七色の光に包まれた。

ちよつと前が見えねえよ……

邪魔だから魔力で排除する。

右の手のひらに魔力を集めて、特に圧縮することも変形させることもせずに、前方に水をまく感じで魔力を放った。

そのちよつとのことなのだが、力加減をミスったか、それともちよつと無意識に苛ついていたか、光は一瞬で消し飛んでしまった。そして爆音。

晴れた視界、最初に飛び込んできたのは壁が広範囲に消し飛んだ城だった。

「んん？　なんでこうなった？」

「てめえ気付いてねえのか？　あの水がかかった時から魔力が増えてんだよ」

先に言えよ！　城壊しちまったじゃねえか！

「どれぐらい増えてるんだ？」

「2、300百倍が妥当だな、まあ俺の全快の時にはおよばねえ

がな」

「じゃあさつきから体が軋むのは……」

「気のせいじゃねえよ、ヘタレなてめえの体が、てめえで垂れ流してる魔力にあてられてんだ」

「くそお……早いとこ何とかしねえとマジで死んじまう」

「っ」か何が飛んできて割れたんだあの薬の入ってた入れ物は。

突然の轟音、城の屋根が吹っ飛んでいる。

やっぱり城の中で何かあるな、もめてるもめてる。この城に俺は住んでるんだし、素通りするわけにもいかないわな……

しょうがないから、やるか。

俺は空から城の中に入る。

城の中も相当めちやくちゃで、所々壁に大穴が開いている。

そして爆心地、3人の悪魔がいる。

1人はエリス様、そしてもう1人はセドナだ。そして最後の1人は……やっぱりあいつかよ、相当面倒なことになってるんじゃないか。

「1人……増えましたね」

「けっ！ 相変わらずム力つく面だ、吐き気がする」

「なにやってんだお前？ エリス様に……何しようとしてんだ？」

「殺すんですが？」

「クソ野郎、魔王でも女だぞ？」

「……魔界にそんなことを言う悪魔がいるとは驚きましたね……ですが、魔界が変わったとはいえ本質までは変わらないのですよ。結局は魔力の強いものが過去でも未来でも現在でも勝つのですよ」

「過去も未来も今も知らねえよ。てめえ等と一緒にすんな」

俺は人間だ、魔界の過去も未来も現在も知らないし、魔界のルールなんてもつと知らない。

ただ人の友達を傷つけた野郎と、魔界だろうが天界だろうが、どこだったとしても女性に対して暴力を振るう様なクズは許さねえよ。

俺は一步踏み出し、とはいっても元々の俺の一步とは違う。その一步で俺とロン毛のアレスまでの距離はほぼゼロになる。

そして拳を握りしめ、全力でぶん殴る。

ゴン、と鈍い音が俺の腕を通して伝わってくる。

アレスは体を宙に投げ出し、そのまま後方に飛び壁を突き破った。

「……なるほど、言うだけの力はあるようですね」

俺は全力で顔を殴り、そしてこいつは思いっきり殴られて後ろに飛び、その体で壁を突き破ったというのに表情はずっと笑顔のままだ。

ポーカーフェイスというか気持ち悪いだけだな、これ。

「いいじゃねえか……てめえはただのひ弱な種族なんだと思って

いたが、やりやできるんだな」

「ちつ、お前の魔力借りなきや闘えねえよ」

「ギャハハハ！ 違いねえがそうじゃねえ」

結構時間はあつたはずだが、アレスは起き上がらない。表情は変えなくても、やっぱりダメージはあるのか？

「……ククク、それでは勝てませんよ」

ゴキン、と嫌な音がした。

今度は俺が顔を殴られたらしい。どうも大人しいのは表情と口調だけらしいな、めちゃくちゃにいてえ。

俺の体は吹っ飛び、壁3枚を体でぶち抜いたところで止まった。

……ちよつと遠くなつてしまった。

とりあえず体を起こそうと、体に力をいれ立ち上がる。

アレスも同時に立ち上がっている。そしてこちらを見ているアレスに向かつて、両手に持った大剣を振り下ろした。

剣はアレスの体を見事に両断した。

しかし、体を両断されているのにアレスは立ち続けている。

……化け物かあいつ？ そりゃ俺も今では化け物かも知れんけど、あんなのありかよ。

「ククク、まだ立てましたか」

しかも体がくつついて直った。
こりゃ粉々にしないと死にそうもない……

とりあえずセドナを助けないと……

「ぐっ……！ ごほっ！」

ヤバイ、苦しい。もう体がガタガタになっちまってる。

口から血が噴出す、あと鼻からもだ。そして全身の筋肉は今にも切れそうになっている、というか部分的に切れてるかもしれない。

……死ぬかもしれないな。

「ぐああ！」

セドナもやられた。アレスに殴られて、俺の真上を飛んでいった。そしてそれと同時にエリス様が動いている。

まずい、実際に殴られて分かったが、アレスは確実にエリス様よりも強い。そして魔力が増大した今の俺よりも上だ。そしてセドナも勝てない。

「……絶対……俺が……エリス様を……」

立ち上がれない俺の横をセドナが大剣を引きずって歩いていく。

「待て……まともに挑んでも無理……は？」

突然セドナの体が光、光った次の瞬間には砕け散っていた。

それは生物が砕け散ったのではなく、まるでガラスのように鋭く

砕けて、空気中に消えていってしまった。

そしてその場には、地面に突き刺さった大剣だけが残っている。

少し離れた位置では、エリス様がアレスに突っ込んでいっている。

第14話：とりあえず決着

殺す殺す殺す殺す殺す殺す！ コロス！

急激に温度が下がったような、鳥肌が立ち体が震えた。

頭の中に直接流れてきた声。それは明らかな怒り。怒り以外に何の感情も含まない純粋な怒りの塊のようで、怖ろしくおぞましく全身を駆け巡った。

その声と同時に、俺の周りの状況も大きく変わる。

アレスに攻撃を仕掛けたエリス様が、その攻撃を止められて反撃を受けようとしている。

ガラスのようにその身が砕け散り、消滅してしまったセドナが残した大剣は刀身から真っ黒な炎を噴出し、大剣全体を包み始めている。

そして俺は、真っ黒な炎に包まれ、触れることすら危険だと理解できている大剣に手を伸ばしている。

俺が剣を掴むと、炎は爆発的に大きく膨れ上がり俺の体を包んだ。熱さを感じない。もしかしたら一瞬にして俺の体は感覚を失うほどに焼き尽くされたというだけなのかもしれないが、違う気がする。もっとやばいことになっている気がするならない。

クロス、クロス！

怒りの感情はこの剣から発信されていた。そしてその矛先はアレスではない、俺でもない、エリス様でもない。しかしどれも当ては

まっではいる。

この怒りはおそらく全てに向けられている。

アレスも俺も、悪魔も、いるなら天使も、そして人間。空も大地も、この大気も、世界そのものにも、そしてこの剣自身にも、おそらくこの感情は等しく向けられているのだ。

正直これはきつすぎる、頭が、体が、心が壊れそうだ……

徐々に炎が小さくなっていく。

視界がはつきりし、目の前の敵を捉えることができるようになった。

もしセドナが、この剣が。怒りを向ける対象を見失っているのであれば、怒りを制御する術を失っているならば、俺が導いてやる。俺があつ野郎を斬ってやる。

「ククク……やる気ですか。戦力的には五分と五分というところですね」

「五分だつて？ さっきまで勝ち目が無いだのと言つてたわりには弱気だな」

「勝ち目はありませんよ。五分というのはあくまで戦力的なもの、いかに強い力を手に入れたとしても、それを振るうあなたが倒れてはどうにもなりませんからね」

悔しいがアレスの言うとおりだ。

俺の体は本当なら立ち上がることもできないはずなのだ。今はこの剣に呼ばれるように体が動いたが、おそらく限界なんてとっくの昔に通り過ぎている。

足は動かない、腕も上がらない。魔力を使った攻撃もはやできない。

こちらからは仕掛けられない。だから待ち構える。アレスが動けば、確実にその体をこの剣で貫く。

「隙が無いですね……まあ、関係ないですけど」

アレスが視界から消える。

そして直後、後ろから背中への強い衝撃。この状況で感覚が麻痺しているのか、それとも別の魔力的な要因か、麻酔を打ったように痛みは感じない。

だが体は前のめりに倒れていく。

もはや踏ん張ることも、首を回して後ろを見ることもできない。ただ最後に、真後ろに剣を飛ばすことだけが叶った。

力を失った俺の体は、そのまま床に倒れこむ。直後吐血、やはり体中にガタがきている。相当無茶だったらしいな……

「……惜しかったですね」

「ちっ……」

「お見事でしたよ、全く油断ならない。そんな力を隠していたとは……」

剣が床に落ちたようで、カン、と金属音が響く。

そしてその直後に、ドスンと床に人が落ちたような音が静まり返った部屋の中に響く。

「あと……少しで……本当に、死ぬかと……思いましたよ……」

途切れ途切れのアレスの声が聞こえてくる。

さっきまでのように、地面に倒れた俺に上から掛けられる声ではなく、全く同じ高さからその声は聞こえてくる。

放り投げた剣がどうなったのかは確認できなかったが、アレスも地面に伏しているようだ。

……これは勝ちだろうか、なんか意識が薄れてきた……

いや違うな。意識はものすごくはつきりしている。ただ体の感覚だけがどんどん遠くなっていく。

動かせない、地面の冷たさも、俺の口から流れている血液の温度も感じられなくなっていく。この感覚は一度体験している……

ああ……タナトスに持っていかれる。

「ヒヤハハ……こりやまたスタボロだな。よくこれで闘ってたもんだぜ」

タナトスが珍しく俺の努力を称えるような事を言うが、こいつはそんな俺の体で普通に立ち上がって、床に倒れているアレスを見下ろす。

俺の感覚をそのまま乗っ取っているのだとしたら……分かってはいることなんだがタナトスって化け物だな、正真正銘の。

「……高いな……」

何がだろっ……

「ガツデム、消すぞ」

こいつは俺の心の咳きに分かるらしい……

ちなみに状況が逆の時、俺は分からない。もしかしたらこいつは、思ったこと全て口から出てきてるのかもしれないが。

「んなわけねえだろ、クズやろう。てめえの魂は外に出てねえから伝わってくるだけだ。俺はいつも魂の破片をごぶああ！ お前の魂からごふう！ 引き剥がして体の外にごほう！」

喋るな！ もういいから！

内臓までめちゃくちゃになってるっばいのに、流れるように喋るなよ！ めちゃくちゃ吐血してるじゃねえか！

つまり、俺の場合は魂が独立してるんだよ！

俺の精神に直接語りかけてくる。なるほどそういうわけか。

というかそんなことができたのなら、最初からそうしてくれ。無駄に血液を消費してしまってるだろうが。

「ククク……止めを、ささないのですか……？」

「けっ！ てめえなんざ何時でも殺せる。今殺してやるほどのもんでもねえよ」

「無理でしょう、私は死にませんよ」

「言ってる……てめえはいずれ、完全に殺す！」

タナトスは俺の右手をアレスに向ける。

凄量の魔力が俺の右手のひらに集中しているのが分かる。一体俺のからだのどこからこんな魔力を引つ張り出してくるんだろうか。俺の体は確かに限界を超えたはずなのに。むしろやり過ぎて、一周回って回復したとか……なのか？

凄まじい魔力が轟音とともに、俺の手のひらから放たれる。

そして、地に伏していたアレスを床ごと吹き飛ばした。魔力の塊は、壁を次々にぶち抜きながら進んで、城外に飛んで行く。

正直、今で死んだんじゃないかと思う。というか跡形も無く消し飛んでしまっている。

……つか死んだだろ。

「死んでねえ」

だから跡形もなくなってるから。普通に死んだだろ。

「これくらいで死ぬ野郎なら、1000年前に俺が完全に殺してる」

なるほど、それなら分からないでもないけど、いまいちタナトスがどれほどに強いのか分からねえんだよな。確かにこの体であれをやったのけるのは化け物級のことを感じるが……

「黙れ、殺すじふっ」

吐血、それも凄量。それも俺の血。

貧血というか、俺の体の中の血液を全部吐き出してしまったんじゃないだろうか。

「あんた、大丈夫なの？」

「ああ？ エリスか……」

「……なんか違う……？ 気のせいかな」

その適当なエリス様の性格に俺は救われた。

俺はタナトスが妙なことを言わないように祈ることしかできないのか……。というかマジでおかしなこと言っただよ。あと、様をつける。

ふざけんな、俺は魔界で一番偉いんだよ！

お前がふざけんな！ 俺はそんなに天上天下唯我独尊野郎じゃねえんだよ！

「あんたがこんなに強いとは思ってなかったな！ 私より弱いと思ってたのに」

「はっ！ 俺がお前より弱い分けがねえだろうが」

「……なんか違和感あるんだけど。それになんか懐かしいわね……無性に腹が立つし」

まずい……殺すか？

ダメだ！ 殺すな！ なんで魔王の思考ってのは、どついう経路をたどつてもそこにたどり着くんだよ。

というかばれそうになつてるのは、お前が100パーセント悪いからな。

突然、強い痛みが走った。

なんだか痛みを感じるとというのが懐かしい。これはおそらく、体の主導権が俺に戻ろうとしているのだろう。良いことなんだが、タナトスが平然とすすぎていたため、どれほどの苦痛が分からないというのはかなり怖い。

感覚はどんどん戻っていく。体を常に全方向に引き伸ばされているような、今までにない凄まじい痛みが全身にかかってくる。

「い、……あつ！ ごほっげぼっ！」

水道の蛇口を捻りすぎたような、凄い量の血が俺の口からあふれ出した。

まだこんなに血液が俺の体内に残っていたことも驚きだが、それ以上にこの量は半端じゃない。

「ちよっ！ 何やってんの！？ 血がとんでるから！」

そこかよ！ とつつこんでしまいそうになる、しかし今の体で突っ込みを入れようものなら、間違いなく俺は死ぬだろう。

あー……ダメだ。感覚が遠くなっていく。

全身が動かなくなり、まぶたも重くなっていく。ただちよつと気持ちが良い。凄く眠たくて、もう眠りに落ちる直前のあれ。いつでも寝れるようなあの状態。

……もう疲れたよパトラッシュ。

「いやー、ルーベンスの絵にも劣らないなあ……………」

「じゃあ今すぐ死ねよ、俺がキツチリ黄泉に送ってやる」

魔界の病院のナースさんって、どうしてみんな綺麗なんだ？ いや言っ直そう。魔界の女の人はずいぶん綺麗なんだ？

いや、この質問の意味は無い。そこに美しい女性がいることは奇跡であり、奇跡に意味を求めるなんてナンセンス……………そこを起こっている、俺はひたすら感動するのみ。

肩の上では天使気取りの悪魔、いや魔王が物騒なことを言っているが気にもならない。

「ほんとに丈夫なんですね。昨日は本当に生死の堺にいたのに」

「いやーそれほどでも。実際に三途の川のほとりまでは散歩してきましたけどね」

「そうなんですか？ 三途の川遠いですよ？」

どうも魔界には実在するらしい。

ただかなり遠いところにあるそう。

俺の話し相手になってくれているのは、ナース服の悪魔、いや天

使。俺の肩の上のふわふわこそが真の意味での悪魔だ。

天使は動物的な特徴は持っていないから、どういう種族の方かは不明なんだけど、金髪でショート。大きな瞳は美しいエメラルドブルー。エメラルドブルーが分からない場合は、沖縄の美しい海の色でオツケーだ。

「あー、コロンちゃんがお見舞いでも来てくれれば最高なんだけどなあ」

「けっ、来ねえだろうよ。てめえ華のねえ面してっからな！」

「言ってくれるな。俺もお前の面を拝んでないだけで、実際見てみれば絶対にそうやって笑ってやるからな」

「あの……誰と話してるんですか？」

やってしまった。今俺はかなり変な人だと思われるに違いない。どうやって誤魔化そうかなあ。そういえば、声を出さなくても、一応こいつと会話することはできるみたいだったよな。

まあ心の声はこっちから聞けないらしいけど。

「ごめんごめん、ちょっと自分自身と」

「……はあ」

「俺のいた国ではさ、そういう習慣があるんだよ」

「そうなんですか」

とりあえず納得はしたようだ。

適当なことを言ったようで、そうでもない。武道の精神は己を磨くことだと聞いたことがある。技を鍛え、体を鍛え、心を鍛える。己の深層心理を知ることでも大切なことのはずなのだ。

まあ俺は武道には一切手を出してないけど。スポーツマンシップすらないけど。

コンコン、と俺の病室のドアを叩く音。

ま、まさか！ セドナはどうなっちまったか分からないし、エリス様もそれなりに重症だった。そうになると、知り合いの少ない俺の元に来る可能性がある人物……
もう、1人しかいないだろ！

「ホホホホホ、お元氣して……危ないですよ、なぜいきなり枕を投げつけるのですか？」

「俺の期待を裏切ったからだ！ 爺が見舞いに来て嬉しいわけないだろ！」

「ヨホホ、それは酷いですよ。実はもう1人来ておるよ」

「マジで!?!」

こ、これは間違いないな。

この爺を除いて、ここに来れる可能性がある知り合い。そして真っ先に入ってくる事を恥ずかしかったこともあの子なら理解できる！
間違いない、深呼吸深呼吸……

「よお！ 元氣か？ って危なあ！」

俺は渾身の力で椅子を投げた。

部屋に入ってきたのは、犯罪者面のいつかに警備の悪魔。俺はてめえの名前も知らねえよ！

なんで見舞いに来るのが、爺とむさいおっさんなんだよ……

「ほんと華がねえな、てめえ」

「うっ……おかしい、こんなはずでは……」

「はあ……あのコロソツッーガキは店があるだろうが。だから来れねえんだよ」

「まさか魔王にフォローされるとはな……」

「うっせえよ、てめえはおっさんと乳練り合ってる」

「絶対嫌じゃボケエ！」

ベッドの手すりを引っこ抜いて、俺は見舞いに来た2人の華がない男どもに容赦なく投げつけた。

まあ良いことなんだけど俺の体はすでに絶好調。

その日のうちに、退院することになってしまった。まあ美人のナースさんと知り合えただけでも良かったとするか……

ちなみに、医務室完備の城の医務室ではなく、わざわざ病院に入院しているのは、昨日の戦闘で城がかなり壊れてしまって修繕作業中、というかほぼ新しく建てているからだ。

あ……ナースさんの名前聞いてねえ！ しまった！

第15話：酒豪と美女で落ちる勇者（前書き）

部活が忙しく、更新が遅れました。
さらに不定期になるかもしれないです。

第15話：酒豪と美女で落ちる勇者

強敵だったアレスとの壮絶な闘い。俺とセドナとエリス様は、どうにかそれに勝利したが、その代償に俺たちが負った傷はあまりにも大きかった。

仮に俺に傷は全治2日程度で、なぜかセドナがケロツとしていてエリス様も大した怪我は無く、城も大人数による猛スピードの作業で元の姿を九割以上取り戻しているのが、まだあの日から3日しか経っていない今日であったとしても。

俺たちは死ぬ気で闘って勝利したんだ。

「はははは！ おんしゃーの言うとおりぜよ！」

「俺は嬉しいぜ、魔界まで来てあんたみたいな気の会う男に会えるとは」

「はははは！ わしもじゃ！ 良い飲み仲間ができて、嬉しいぜよ！」

「俺は未成年だから酒は飲めねえよ」

「はははは！ まつこと面白いギャグじゃな。酒が飲めない？ わはははは！」

俺はコロンちゃんの店に顔を出している。

まず最初に、店に入っすぐ俺はこの男に気付いた。なぜならカフェ風のお洒落な店内で、酔っ払った酔っ払ったと繰り返しているのだ。

確かに酔っているふうにも見えなくない、というか十中八九はべ

ろんべろんに酔っていると思うだろう。

酒を出せ！ とカフェで叫ぶおっさんに当店では酒類は扱ってはいませんと言いつづけていたコロんちゃんの精神的な苦勞は計り知れない。

俺はその時点で思った。こいつを殺そうと。

だが、コロんちゃんのような可憐な女性の前で、そんな血なまぐさい惨劇をおこせるはずも無く、仕方なく話し合いに持ち込んだところ……

「わしはおんしのごときは好きぜよ！」

こうだ。正直俺もなぜこうなったのか分からないが、多分このおっさんには友達を作る才能がある。お互いに名前も知らない、今さつき会ったところの人物だとは思えない馴れ馴れしさ。だがそれについて、あまりにも普通にその態度であるがために、こちらは怒りを覚えることは無い。

「気持ちわり……」

「ひどいですよ、裕太さん」

素直に気持ちを言葉に表した俺を、コロんちゃんが注意する。

しかしだ、この男。こちらも気軽にそうさせる空気をまとっているのだ。あと、名前で呼んでくれてありがとう。もう、死んでも良い。

いや、だめだ。ようやくフラグが立ったっぽいのに、死んでたまるか。

「わははははは！ 気にしちゃーせんよ。わしは誰の言うことも気

にしゃーせんからの」

おっさんはさっきから笑いっぱなしだ。疲れないのだろうか。しかし喉は渴いているようで、ホットなコーヒーらしい黒い液体を一気に喉に流し込んでいた。そしてあまりの熱さにむせ返っている。

「けんど、美人は良い。美人は宝物じゃ」

「分かるか、おっさん。あんた、魔界で初めての親友になれそうだ」

「おおとも！ まっこと良い胸だ！」

「うんうん、ただストレートすぎる、セクハラだ。セクシャルハラスメント。ただまあ、豊満な胸は人類……もうどこでも宝物だな」

「裕太さんの言い方もどうかと思うんですけど……」

俺とおっさんの会話に、コロンちゃんは若干引き気味だ。

人間界ならばこんな感じのおっさんは山ほどいるのだが、この魔界では少ないのだろう。なにせ、魔力が全ての世界らしいからな。

別にエリス様やセドナも普通の、俺からすれば人間と大差は無い人格を持っているが、このおっさんは魔界に来てから出会った誰よりも人間っぽい。普通に街にいそうなのだ。

といっても魔界に来てからほとんど日は経っていない。こんな奴も探せばそこそこ多いのかもしれないな。

人間臭く感じるのは、こいつがなぜか土佐弁っぽいのを話すからだろう。

「おっさん、名前は？」

「ウィルド、じゃ！」

「俺は裕太だ、よろしくな」

ウィルドにそう言うと、ウィルドは右手を俺に出してきた。これは握手をしろということだろうな。どこまでも人間っぽい。

俺がウィルドの右手を掴むと、その手にグツと力が込められた。

痛い、この野郎力強いな。

俺も負けじと力を入れる。

こっちは一応、平均的な悪魔を遥かに超える魔力を持っているから当然手加減はする。ただ結構な力は込めている。

というか、かなりの力を込めている。多分金属バットを圧縮する程度の力は込めていると思うのだが、ウィルドの手はビクともしない。

だが俺が力を込めているということは分かったようで、ウィルドは俺の顔をチラツと見ると、にいつ、と口角を吊り上げて嬉しそうに笑った。どうも痛くは無いらしい。

ウィルドは力比べだと思ったのか、さらに力を込めてくる。

骨がゴリゴリ動いて痛い。向こうがそういうつもりならばと、俺も力をさらに込める。ごつい岩石も砕くぐらいのちよっとやりすぎ感がある力を込めたのだが、ウィルドは若干表情を歪ませるくらいで別段苦痛でもないという様子だ。

それならば。

俺は本気で力を込めようとしたのだが、その前に、ボキリ、と実に嫌な音が僅かな振動とともに俺の体を流れていき、足から地面に逃げた。そして手には力が入らない。

「いつてえ！ この……折れたじゃねえか！」

「わはは！ わりいわりい、ちつくと力をいれすぎた。けんどくしぶりに熱くなった！」

人の手の骨を潰すように砕いた男は、悪びれる様子も無く笑っている。

腹は立つが、もし俺の手が折れなかったら、うっかりウィルドの手を同じ状況にしていたかもしれないのだから、あまり強くは言えない。

「だ、大丈夫ですか！？ なんか、嫌な音がしましたけど……」

コロンちゃんが心配そうな顔をして俺の、思いつきり腫れ上がった手を見ている。

うーむ、そんな表情も中々……だがやはり、その美しさは笑顔であるときに一番映える。ここは、心配させないためにもちよっとリラックスさせて上げないとな。

「大丈夫だよ、ほら、手首こんなに曲がるし」

ちよつと痛い、手首をくねくね動かしてみせる。

なんの自慢にもならないが、俺は手首の間接、指の関節がすごく柔らかい。元の世界でもちよこちよこやっていた、芸ともいえないような特技がこれだ。なんと手の甲がむちゃくちゃ腕にくつつく寸前まで曲がる。

完全にくっつかないところが微妙だ。

とりあえずやってみると、なんと腕についた！
これは進歩なのか。

「きやあつ！ ちょっと大丈夫なんですか！？ 手首じゃないと
ここで曲がってますけど……」

関節が増えた。つーかどんな折れ方をしているのだろう。むちゃ
くちゃ痛い。

俺の手は、手首と指の付け根の中間ぐらいの位置で不自然に折れ
曲がって手の甲が手首にくっつくというかなり痛々しい状況になっ
ていた。

コロんちゃんはあまりの惨劇に、直視できないらしく目をそらし
ている。

そんな中でも犯人のウィルドは笑っている。どんだけ神経が図太
いのか。まったく悪びれる様子が無い。

「だ、大丈夫だよ……こんなの、引っ張って、治せば……」

脱臼を直す感じで手を引っ張る。

すると、バキリ、と嫌な音がした。そしてものすごく痛い。コロ
んちゃんは「ひいっ」と声を漏らしてきつく目を瞑ってしまった。
しかしやはり、犯人のウィルドは笑ったままだ。

今の音がツボだったらしく、さっきよりも笑い方が激しくなっ
ている。

「はははは！ 痛そうなのう」

「いてえよ……」

これがもし、元の人間の世界で、俺がタナトスの魔力を持っていなかったら激痛にのた打ち回っていることだろう。

「笑い事じゃないですよ！ ちょっと見せてください！」

コロンちゃんが声を張り上げる。今の俺は、化け物だからそのまま心配することも無いんだけど……やさしいな、とても良い子だ。潰された右手をコロンちゃんの方に出す。

するとコロンちゃんは、右手に青色っぽい魔力を集めて、塊にし、俺の右手に近づける。

魔力の塊って……超痛いじゃん！ この子ドS？

手を引っ込めることも敵わず、右手に魔力が触れる。しかし痛くない、むしろ暖かくて気持ちが良い。

魔力の光も、痛いくらいの強い光ではなく、ほわっとした柔らかいやさしい光だ。

しばらくそのままにしていると、徐々に手に溜まっていた熱が冷めていくのが分かる。

「ほお！ 回復魔法が使えるのか！？ 凄いなあー」

「はい。まだまだなんですけどね」

「回復魔法なんてものがあるのか……」

俺がただ感心しながらずっと手を見てみると、痛みはその間もがらんびいていく。魔力はただ相手にぶつけて攻撃するためのもの

だとばかり思っていたが、こんなこともできるのか。

「骨は……治りませんでしたけど……」

「ありがとう、痛みは完全にひいた」

嘘でもなんでもなく、骨折しているはずなのに痛みが全く感じられないのだ。

これが怪我の直後とかだったら、相当重傷だと思ってしまつてころだ。

見た目にも、さっきまで相当腫れていたのに、もうほとんど腫れていない。骨はまだ折れているのだから、完全に腫れがひくことはないが、誰も骨折だとは思わないほどだ。

「はははは！ すっかり酔ってしもうたのぉ！ 気分がええ！」

「酒飲んでないのか？」

「酒も喧嘩も、気合じゃぜ？ 気持ちの問題ぜよ」

気持ちで酒もなく酔えるのならば、世からアル中は消える。なにせ酒が欲しければ、気合でどうにかなるといふ理屈だ。そりゃ無茶なのは分かる。

ただウィルドの顔は、確かに最初よりも赤みを帯び、声も高くなり、酔っ払ったおっさんそのものになっている。一体どういふ体の構造しているのだろう。悪魔はみんなこうなのか？

「魔術かなにか、術の類でこいつは酔っ払ってやがる」

「いやいや、そんなことないだろ。こいつは本当に気持ちの問題なんじゃないか？」

真剣に考えるタナトスもどうかとは思う。

「いや、間違いねえ。いいか、呑まれんじゃねえぞ？ あの手の輩は何を考えているか分からねえ。ここは一応詐欺師の街だ、てめえは温いんだよ」

「大丈夫だろ、そんなに……」

「だから、てめえは大人しく俺の忠告を聞き入れやがれ。素人が」

「お前こそ。タナトスは1000年魔界にいなかったんだろ？ そんな物騒でもないんじゃないのか」

俺がそう言ってもタナトスは納得が行っていないのか、俺にぐちぐち何か言ってくる。具体的には「ボケ」やら「くず」やら「チキン」。そして極めつけが「この不細工が！」だった。てめえの顔が見られないからって、それはないと思う。つか関係ないだろ。

「わはははは！ 乾杯じゃあー！」

ウィルドが叫ぶ。手にはコーヒーっぽい飲み物。酔っ払いのおっさんが大声出しながら、ティーカップをかがけている光景というのは実に不自然だ。

だが、酔っ払うのはアルコールよりも気持ちの面が大きいと語るこの男にとって、飲み物がビールだろうとコーヒーだろうと麦茶だろうと関係ないのだろう。

「何にだよ」

「今日までの全てに……な！ はははは！」

ウィルドに促され、俺もコーヒーっぽい液体の注がれたティーカップを持ち上げる。コロンちゃんも同じようにしている。

「乾杯！」

「「かんぱーい」」

ウィルドが大声で言った後に、俺とコロンちゃんも続く。何に乾杯なのかはどうでもいい、なんだか気分が良くなってきた。

心臓の鼓動が早まり、顔が徐々に熱くなってくる感じがする。

酔っ払うのも気持ちの問題というのも、まんざら嘘でもないのかもしれない……

コロンちゃんの表情も、だんだん接客スマイルから目がうつろになり、なんだか危険な表情に変わってきている。危ないくらいに美しく、魅力的に感じる。

自分で声が高くなってるのが分かる。酔ったことはないけど、もしかしたらこれが酔っている状況なのかもしれない。

「案外、酔っもんだな……」

「ちっ、見事に呑まれやがって、この不細工が」

「呑まれてねえよ、酒は飲んだけど……」

「酒飲んでねえだろうが！ 冷静になれ！ 二つに酒はないっつ
ったのはてめえだろうが！」

うるさいタナトスも気にならなくなってくる。
だんだん、頭がボーっとしてきた……

「いやー飲んだ飲んだ！」

「中々の飲みっぷりじゃったぞ！ まあ、酒は無いんじゃないかな！
わはははは！」

「「「ははははは！」「」「」

「ああー……頭いてえ」

「仮想の酒で頭痛になってんじゃないやねえよ」

「妄想って……」

記憶がごっそり抜け落ちている。楽しかったということだけが心を満たしていて、主に何をしていたかは全く思い出すことができない。

俺は今、テーブルに突っ伏している。コロンちゃんはすぐ横で机にダラつともたれて眠っている。

すーすーと寝息をたてて、どうやらマジで眠ってしまったているようだ。これは起きそうも無い。

かくいう俺も、めちゃくちゃ眠い。

「はははは！ もう終わりながか？ まあ楽しかったぜよ」

「元気だな……」

「わしは慣れちゅうからのお。ははは、わしは本当は、今は仕事中なんじゃがな。上の言う通りにするのがめんどくそつての……じやがまあ、仕事をしてくるか！」

「ああ……そうか、元気だな」

ウィルドは店を出て行った。また会うことはあるだろうか、仕事だと言っていたが何をやるのだろうか。

遠くから来ているのだとしたら、もう会わないかもしれないな。

頭痛いし、眠い。考えるのはやめよう……

「おい、クソ野郎！ 寝てんじゃねえ！」

「寝させてくれ……頭が痛い……」

タナトスの言葉を見無視した、というかもう聞く体力が残されていない。

でも戦いの後ってわけじゃない。散々騒いで、まあ何をしたのか憶えていないのだけど、楽しいことをして疲れた後は、簡単に、安らかに眠れるものだ。

よこで眠る美女を数秒見つめた後、俺のまぶたは完全に閉じられた。

そして俺が目を覚ましたのは、眠ってからどれほど時間が経っていたのか。時計を確認していない今は分からない。

無論、時間の確認はする。だが今は、店の外から見えるあまりにも衝撃的な状況に、俺は足を動かすことができない。

俺は、3日前に飛んでしまったのだろうか、いや、そんなわけがないんだ。それは分かっている。だがここから見える城は、下手をすれば3日前以上のダメージを受けて崩壊寸前となっている。

「な、なんだこれ……」

何時間も眠っていたつもりだったが、この店に来店した時からまだ、3時間ほどしか経っていないのが現在の時刻だった。

第16話：守る闘い

「ううう、頭痛いです……」

コロんちゃんは完全に二日酔い状態だった。一応まだ勤務時間であるはずなのに、椅子にだらしなく座り込んだまま、動かなくなっている。

考えてみれば、酒なんか飲んでないし、飲めるわけがない。無いんだから。

それでも俺とコロんちゃんはこの様だから、ウィルドの奴が何かしたというのが考えられる考えの中では一番近いだろうな。

しかしあいつも本気で楽しんでたようにしか見えなかった。それに意味はあったのだろうか。

「けっ、城が壊されようとしてもいい。てめえ殺されたかもしれないんだぜ？ 殺されとけよ」

「心配してくれるんじゃないのかよ……ま、されても気持ち悪いが」

「当たり前だ。……城を攻めたのも、あの酔っ払いのクソ野郎だ。間違いねえ」

「やっぱりそうなのか……」

俺はあの城を、エリス様やここに来てから出会った数少ない仲間たち、そして美少女にあだをなす敵ならば闘わなければならぬ。あいつがもし敵ならば、それでも闘うことになる。

できれば嫌だな。あいつは人間っぽい。

ただあいつがあれをやったとしたら、相当強いということになる。ほんの僅かな時間で、まだ復旧作業の最中とはいえあの城をほぼ壊滅状態にしたのだ。

「てめえの目的は元の世界に帰ることだろう。だがそれは、俺の目的を果たした後だ」

「は？ 聞いてねえよ」

「俺の目的が達成されれば、すぐにでも送り返してやるぜ。てめえみてえなチキンはいても邪魔なだけだ」

「お前の目的って、魔界で戦争を起こすとかだろ？」

「それもあるが、第一には体を取り戻すことだ」

「正気か？ 1000年経ってるんだろ？」

「この魔王タナトス様の体が、1000年やそこらで朽ちるはずも無い。この魂が生きている限り、俺を体は待っているはずだ」

1000年。俺にしてはものすごく長い時間だ。だがタナトスからすれば短いだろう。こいつの常識はまだ掴みきれないな……

「ここで、2択問題だ。どっちでもいい、どのみち選択権はお前にあるわけだから……」一つ目は、ここであの野郎を殺しに行く」

「そりゃねえよ……」

「……なら、尻尾巻いて逃げることだ」

逃げる、勝てないわけでもないのに、闘いたくないという理由で逃げる。

城が壊され、仲間に、美少女に危害が加わるかもしれないのに逃げる。

だけどウィルドと戦いたくないというのもある。はっきり憶えていないが、あの短い時間で俺はあいつとも仲間になってしまった。

まあ、俺の一方通行な気持ちだったかもしれないけど。

どうするか、分からない。とりあえず答えは保留することにする。

「城に戻るか」

タナトスは返事をしなかった。

壊滅寸前の城は、間近で見ると、アレスの時以上のダメージを受けているのが分かる。

あちこちの壁は吹き飛び、最上階はほとんど残っていない。

中央の中庭にいた、ドラゴンも瀕死、もしくはすでに生きていないかもしれない。地面にぐったりと倒れこんで動かない。

負傷した悪魔たちもかなりの人数になるようで、おそらく殺されたものもいる。

次々と怪我をした悪魔が運び出されていく。これほどの力で、この城を圧倒的に破壊した犯人。やっぱりウィルドなのだろうか……

「これは、どういうことなの……」

呆然と立ち尽くしていた俺に、後ろからエリス様が話しかけてきた。

特に体に傷も汚れも無い。今の言葉からして、留守のところを攻め込まれているようだ。

「誰かに、攻められたみたいだ」

「見りゃ分かるわよ……一体誰が……」

「エリス様！」

警備の悪魔がエリス様の名前を呼びながら走ってくる。

かなり急いでいるようだ。俺たちの近くで立ち止まると、せえぜえと激しく息をしながら、用件を伝え始めた。

「セドナが、やられました……！」

「くっ……！」

その言葉を聞いた瞬間、エリス様は表情を歪めた。想定外の事を聞かされたという顔ではなかった。多分予測できていたのだろう。

そしてその予測できた最悪のシナリオに、表情を歪めたのだ。

セドナが狙われる。詳しくは分からないが、アレスもどうやらセドナを狙っているようだった。

そして犯人がウィルドだとすれば、あの2人は繋がっているということになる。

「助けるわよ」

「……ああ！」

別に決まったわけじゃない、ウィルドが犯人だと。

だったらそんな不確定なことよりも、セドナを助けるということ
を優先すべきだ。

「場所の見当はついてるのか？」

「大体はね」

城に背中を向けて、走り出したエリス様を俺も追いかけた。

町を抜けた。走っているのは、誰も通らないような町外れの道。
確かに悪人が隠れていそうな感じもするが……そんな露骨にはなあ。

だんだん周りに高い木が現れ始め、徐々に森の中へと進んでいる
ようだ。

周りには、魔獣と呼ばれるものもちらほらいるが、俺たちの走る速度は今ものすごい速度になっているので1匹として飛びかかれるものはいない。

進んでいくと、どんどん気が少なくなっていく。多分森の出口に近づいているのだ。

森を抜けた。そこはかなり荒んだ町、いや町ともいえないようなホームレスたちの居住区みたいな場所だ。

「ククク、来てくれると思っていましたよ。エリスさん、そしてあなたもね」

突然、目の前に見知った顔が現れた。

3日前に、城を破壊してくれたアレスだ。確かあの時タナトスが消し飛ばしたはずの男が立っている。

「けつ、やっぱり殺したくらいじゃ死なねえか」

最初から全開で行く。魔力を開放する。

俺の体からタナトスの魔力があふれ出し、その強大な魔力が俺の体を壊していく。

体が朽ちるまでの時間がタイムリミットになる。俺は地面をけり、一気に距離を詰めて、アレスの顔面を右拳で捉えた。

ゴキン、と鈍い音がしてアレスが地面を転がった。そしてそこにエリス様が追撃をかける。

エリス様はポケットから何かを取り出した。透明なクリスタル、そしてその中には光の玉みたいなものが光っている、魔界らしいものだ。

エリス様はそれを人差し指と親指で割った。
ピーン、と高い音がしたかと思うと、エリス様は飛んでいた。

そしてアレスの頭上から、攻撃する。

「カオス・インパクト！」

エリス様の体から、普段のピンク色の魔力ではなく、真っ黒の魔力が放出され、球形に形を変える。

そしてそれが、アレスを押しつぶした。

魔力球は爆発するのではなく、その場で渦を巻き、アレスごと振れながら圧縮され消滅した。

その時アレスも消滅したのだが、消滅したポイントから七色の炎が噴出してきた。

俺とエリス様は炎を避けて後ろに飛んだ。

炎はその場で大きくなり、羽になり、羽は中心を守るように閉じられた。

炎が一瞬にして膨れ上がりまた羽に戻った。

中心には消滅したアレスがまた立っていた。

「ククク、無駄ですよ……」

アレスはこちらに飛んできた。狙われたのは俺だ。

初撃のパンチをかわし、俺は鳩尾を蹴り上げた。体がふわっと浮き上がり、バランスをなくしたアレスに向かって俺は、魔力の塊を

ぶつけた。

しかしアレスは、羽を羽ばたかせて空中で移動し俺の攻撃をか
わす。

「2対1なのよ？ 避けきれないわよ！」

エリス様が一步下がって体勢を落とした。

「本当は、あいつを殺す技んだけど……あんたに使うわ。光栄
に思いなさいよ」

エリス様から真つ赤な魔力ではない何か、液体のようなものが大
量に放出された。

……血、だよな。 出血多量で死んだりしないよな？

「エリスは種族で言うところのヴァンパイアだからな、本来あいつた
類のえぐい技が得意なんだよ」

タナトスは「ただ……」と一度区切ってから言う。

「あれはヴァンパイアでも相当の輩しか使えねえ術だな。見たこ
とがねえ、この1000年であんな術をなあ……」

魔力の塊で、ふわふわと浮いているだけのタナトスが、今なんだ
か微笑んでいるような気がした。

まるで、教え子の成長をちよつと誇りに思うみたいな。

「ギャハハ！ この手で殺すのが楽しみになったぜ！」

前言撤回。

「ブラッディ・フェスティバル！」

大量の血液が怖ろしい、まさに俺みたいないな人間が想像するような悪魔たちへと姿を変えた。その数ざっと10は超えている。そいつ等は真つ赤な体に血でできた巨大な武器を持って、怖ろしい速さでアレスに突っ込んでいく。

だがアレスはそれをさらに高速で動いてかわす。

すると飛び上がったアレスめがけて、血の悪魔が口から魔力の光線を放つて攻撃する。

まさかあの血の悪魔が魔力を使えるとは。

アレスも予想外だったらしく、攻撃は直撃した。

ダメージを受け、地面に落ちたアレスめがけて悪魔たちが思い思いに攻撃する。その光景、まさに血祭り、ブラッディ・フェスティバルだ。

「終わりね……ブラッディ・ケージ」

血の悪魔たちが形をなくし、液体に戻ってアレスを飲み込んだ。

そして直後には、血はその姿を巨大な檻に変えて、アレスをその中に閉じ込めた。

「ククク、これだけでは何にもなりませんよ」

「ええ、そうね。このまま出すつもりないし」

「!？」

「あんたは不死かもしれないけど、逆に永久にその中に居続けることになるわね。じゃ、次行こっか」

「ああ、でも大丈夫？」

「何様よ、あんたに心配されることなんてないわ……でもちよつと疲れたし、任せていい？」

「分かった」

「うん、じゃあ、セドナのことよろしくね」

エリス様は俺の目を見て言った。やっぱりセドナを助けたいという想いは強いみたいだ。

こうなったら何がなんでも助けないとな。

「絶対、助ける」

「……」

タナトスは無言だ。呆れているのか、俺と同じようにセドナを助ける決意をしたのか、表情がほとんど分からないデフォルメされた適当な魔力の塊のこいつからは読み取ることができない。

俺はタナトスと一緒に、廃墟のような居住区に入っていった。

行ったわね……任せたわよ。裕太……セドナのこと。

「ククク」

居住区の中へと入っていった裕太の後姿を見送っていたエリスの後ろで、エリスの術、『ブラッディ・ケージ』によって閉じ込められたアレスの表情は、一瞬焦りが見えたものの今は余裕の笑みだ。

「限界でしょう、この檻も、あなたの魔力も……」

「さあ？ あんたをもう2、3回殺すことはできるけど？」

「ククク、最初から死ぬ気でしたか……？」

アレスは血の檻に手を掛けた。するとその部分が、もろく崩れ、ただの液体へと戻った。

「あの神剣……いえ、あの青年に惚れましたか？ ククク、魔王エリスともあるうお方が、随分と丸くなったものですね」

「は？ なに言ってるの？ 私は最後に、この手であんたを殺してやろうと思ってただけよ。あいつは邪魔なの、だから先に行かせた」

「ククク、できますか？」

「やるのよ！ 魔界戦争？ そんな馬鹿げたもの、もう必要ない

のよ！ 絶対に起こさせやしない……！」

エリスが叫ぶと、アレスは血の檻を完全に破壊し、簡単に檻から抜け出した。

ただの液体に戻った檻は、もう一度エリスの体へと帰還する。

「ククク……アハハハッ！ そのセリフ、あのころのあなたとあの男に聞かせてやりたいものですね……！」

アレスは初めて、心のそこから笑った。あまりに可笑しく、そのセリフが滑稽なものであったと。

そして双方が構えた。

エリスはポケットから先ほどにも割ったクリスタルを取り出し、また割る。

キーンという高い音が鳴り響き、エリスの体から沸きあがる魔力がもう一度強いものとなる。

「魔力結晶の使いすぎは、体に毒ですよ……まあ、言っても無駄でしょうね」

「確かに気にする必要は無いわね、ここで死ぬあんたには」

エリスが飛び、魔力球を打ち出し、戦闘がまた始まった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0664j/>

魔王に連れられ魔界旅行

2010年10月12日00時21分発行